何故「ムカサリ絵馬」は怖い話になったのか

― 山形県村山地方の供養習俗の変遷に関する一考察 ―

山本　亜季
YAMAMOTO Aki

『歴史遺産研究』第14号　東北芸術工科大学歴史遺産学科（2020年3月）抜刷

何故「ムカサリ絵馬」は怖い話になったのか
── 山形県村山地方の供養習俗の変遷に関する一考察 ──

How did "Mukasari Ema" grow into a scary folktale
A study on the historical transformation of the customs of service for the dead in Murayama area of Yamagata Prefecture

山本　亜季　YAMAMOTO Aki

要　旨

「ムカサリ絵馬」とは山形県村山地方に分布する死者供養習俗である。山形などの方言である「ムカサリ」は結婚のことを指す。未婚の死者と架空の伴侶を婚礼姿で描いた絵馬を、寺社に奉納することからこの呼称が定着した。しかし、近年ではこの習俗がホラー作品を中心にフィクションやコンテンツのテーマとして取り上げられ、「生者を描きこむと死者に連れていかれてしまう」という禁忌の面を強調されるようになった。本来「ムカサリ絵馬」とは供養習俗であり、死者を傷つける力はない。にもかかわらず、何故「ムカサリ絵馬」は本来の習俗と乖離した形で怖い話になったのだろうか。調査の結果、この現象は本来異なる習俗である「冥婚」との同一視、「禁忌」という一部のみで共有されている認識が全体の共通認識であるかのように思われていること、創作者が「この作品はフィクションである」という前提を盾に本来の習俗の説明や創作との違和を説明していないことなど、創作者にとって都合のいい部分を抜き出し、強調して描かれたことが原因であるとわかった。習俗をテーマにコンテンツを作ること自体は、伝統や信仰に興味のない若者でも触れやすくなるというメリットなどもあるため、一概に悪とは言えない。だが、「ムカサリ絵馬」のように一面だけを誇張され、その認識が訂正されないまま拡散・定着することによって生まれる誤解や、本来の習俗との乖離も少なくない。習俗を調べ、記録する研究者と、創作によって新たに付加価値を与え、広めることのできる創作者…この二者の間にある認識のギャップを埋めることにより、様々な文化や習俗の価値観をアップデートし、継承や保存の一助とすることができるだろう。

キーワード：ムカサリ絵馬　死者結婚　コンテンツ化　禁忌　供養

1．はじめに

「ムカサリ絵馬」とは、死者の冥福を祈り、死者と架空の伴侶の結婚式や婚礼衣装をまとい並んだ姿を絵馬に描いて奉納する山形県村山地方の供養習俗である。

筆者が初めて「ムカサリ絵馬」を知ったのは大塚英志原作、山崎峰水作画による漫画作品『黒鷺死体宅配便』だった。この作品は口寄せ能力を持つ主人公など特殊な力を持つ5人が望まぬ形で死を迎えた遺体の声を聴き、報酬と引き換えにその願いを叶えていくホラー漫画である。その中での「ムカサリ絵馬」はムカサリ絵馬供養を行う際の禁忌とされる「生きた人間を描くと死者によってあちらの世界に連れていかれる」という面を強調されており、ムカサリ絵馬を用いて人殺しを行っていたグループが主人公たちの手によりしっぺ返しをされ、最後は自らもムカサリ絵馬によってあちらの世界に連れていかれる、という終わり方になっている。

ここで注目されるのは、この作品では「ムカサリ絵馬」が「他人を害する呪い」のように扱われている点である。本来「ムカサリ絵馬」は結婚する前に亡くなった死者を幸せの一形態である「婚礼」の姿で絵馬に描くことにより慰め、遺族の気持ちを整理し、楽にするための供養の習俗である。

だが、「ムカサリ絵馬」という習俗自体に馴染みがなかった筆者は、この作品を読んでから「ムカサリ絵馬＝禁忌を破ったものは死ぬ」といったようなイメージを持ち、そのことに疑問を持つこともなく、一度は「呪詛となったムカサリ絵馬」と言うような題で卒業論文を書こうと思ったほどであった。

では、現代の「ムカサリ絵馬」はどのような習俗として伝わっているのだろうか。以下は「ムカサリ絵馬」を扱う

ニュース記事の記述である。

「山形県の村山地方には、そんな遺族の痛切な思いを絵馬に託す「ムカサリ絵馬」という風習がある。「ムカサリ」とは、方言で「婚礼」を意味する。絵馬には、死者と、架空の相手との結婚式が描かれる。……絵馬のルールは一つ。実在の人物を絶対に描いてはいけないことだ。あの世に連れていかれてしまうことがあるからだという（Yahoo！ニュース 2017/3/6　11:00配信）。」

この記事で注目すべきは「死者の結婚」「供養」「禁忌」の三つの要素を取り上げ、中心として述べていることである。このことから、論文などの学術的研究ではない、「一般的」な習俗として語られる「ムカサリ絵馬」はこの三つの要素、ないし性質を根幹に置いて語られていると言うこともできる。

「ムカサリ絵馬」のホラーコンテンツ事例でもやはり禁忌の部分を誇張された話となっていた。

本論文では都市伝説や現代のホラーを好む若者の思考、変化し続ける「ムカサリ絵馬」奉納習俗とそれを取り巻く環境変化などを通じて、何故一地方の供養習俗であった「ムカサリ絵馬」が取り上げられ娯楽化されたのかなどを考察する。

また、その結果を通し、「現代の若者がホラー作品・コンテンツを面白がり、求め、消費する理由」とその裏側にある死生観をもとに新たな見方を提示し、その是非を検証したい。そして、今回の調査研究結果を通し、現代の日本社会では「ムカサリ絵馬」はどのように扱われているのか、この奉納習俗はこれからも続いていくのか、などの諸問題に関しても考察する。

調査方法は2018年に行われた山形ビエンナーレ内の「ムカサリ絵馬」展示に関わったキュレーター三瀬夏之介氏、修復家大山龍顕氏、「ムカサリ絵馬」を貸し出した久昌寺住職氏への聞き書きと東北芸術工科大学の学生に実施したアンケート、先行研究による資料収集等を用いた。

なお、「ムカサリ絵馬」という言葉自体は1980年以降に頻繁にみられるようになった言葉であり、小田島建己は論文の中でその影響が山形県出身の詩人、真壁仁が昭和54（1979）年に起こした論考、「幻の花嫁」から来ていると述べている（小田島 2010:34）。これにより、本論文では「未婚の死者の冥福を願い、架空の相手と共に結婚式を行っている様子を絵や写真によってあらわし、額にした絵馬」を真壁に倣い、「ムカサリ絵馬」と呼ぶこととする。

2．先行研究にみる「ムカサリ絵馬」と奉納習俗

（1）「ムカサリ絵馬」と「冥婚」

■「ムカサリ絵馬」とその語源

「ムカサリ絵馬」とは結婚式の様子を描いた絵馬のことであり、死者供養を目的として寺社に奉納される。ここでいう絵馬とは岩井宏美が「小絵馬」と分類するところの五角形の、多くは祈願のために神仏に対し奉納される絵馬ではない。大きさは個々によって異なるが、特定の絵が描かれた平坦な木板谷や紙であり、紙を媒体にしたものは額装された状態で堂内などに掲示される（岩井 1974）。

「ムカサリ絵馬」の奉納習俗は山形県村山地方に見られ、絵馬上には婚礼あるいは婚礼に付随する場面が描かれている。特徴として、この絵馬に描かれる新郎新婦の片方は死者、もう片方は架空の人間である。これは生きた人間を描くと死者に生者が連れていかれてしまう、という禁忌があるとされているためであり、漫画やドラマなどの娯楽コンテンツで「ムカサリ絵馬」習俗が用いられる場合はこの点を誇張、重要視されることが多い。また、論文ではなくインターネットや新聞記事などでこの習俗の情報を集めようとすると、高確率でこの「禁忌」について触れられている。

「ムカサリ絵馬」の供養対象となる死者には研究者によって若干の相違がみられるが、一般的には「未婚の死者」である（小田島 2009ほか）。

奉納は少なくとも明治期から確認できるとされるが、小田島らの調査では奉納が活発になり奉納数が増大するのは比較的近年のことであるとしている（小田島 2009:15）。

また、志賀裕紀は自身の調査の中で現在発見されている「ムカサリ絵馬」で最も古いものは明治28（1895）年のものであり、志賀が調査した範囲では江戸時代以前のムカサリ絵馬は発見できなかったとして、起源はよくわからないが、明治以降に発生した習俗ではないか（志賀2010:222）としている。

同じ東北地方である青森県には花嫁、花婿の人形を奉納する習俗があり、こちらも死者供養を目的としてなされている。松崎憲三は青森県津軽地方の一部にも「ムカサリ絵馬」ないしその奉納習俗が存在するとしている（松崎 1993a:83）が、当地方で奉納されている絵馬は民間巫者であるオガミヤサンの教えにより高価な花嫁人形のかわりにと奉納されたものであるという研究もあり、高松敬吉は「西の高野山の婚礼絵馬」と記載している（高松 1993:19）。そのた

め、明確に「ムカサリ絵馬」と同一視していいのかという点には若干の疑問が残り、これからより詳しく差異を研究していく必要があるだろう。

志賀が『日本方言大辞典』(1991)で調べたところによると、「ムカサリ」とは山形の方言で結婚式を意味するという。これは「迎えて去る」を語源としている(志賀 2010:223)。

未婚の死者と仮想の人物の結婚式を描いた絵馬」が「ムカサリ絵馬」という言葉で表記されるようになったのは先述した真壁の記述以降とされる。それ以前の先行研究の中では、「婚礼の式に臨んでいる絵」「婚礼の額」「結婚式の絵馬」など、調査者によって表現にブレがあった。

つまり、小田島も述べている通り、「ムカサリ絵馬」という言葉は真壁の記述が起源となっている可能性があり、これが論文や「ムカサリ絵馬」を説明する表現の中で多用されるうちに定着したものと思われる。

志賀はムカサリという言葉が山形県村山地方の人々の間で日常的に使われるほど浸透しているとは思えないと述べた(志賀 2010:223)。しかし、近年では男女が入れ替わって新郎新婦を演じ豊作を願う祭りである「貉のムカサリ」や花嫁行列である「むかさり行列」が地元の習俗かつ観光行事として行われ(「山形伝統の婚礼儀式〈むかさり行列〉復活　最上」『朝日新聞』2018/5/27)、結婚を「ムカサリ」と呼ぶことやその呼称を冠した祭りが新聞などに取り上げられる事例などがままある。

2018年には現代アートイベントである山形ビエンナーレにて「ムカサリ絵馬」を用いた展示が行われ、現代風に描いた「ムカサリ絵馬」のほか、「ムカサリ絵馬」を所蔵する上山市の馬王山久昌寺の協力を得て、実際に奉納された絵馬の展示も行われた。そのため、現在も絵馬習俗を含む「ムカサリ」とそれを取り巻く状況は変化しつつあることに留意すべきである。

■「冥婚」―死者の結婚

死者と結婚を連関させる事物の奉納習俗、すなわち「死者の結婚の継承」の奉納習俗は、「冥婚」ないし「死霊結婚」などとして考察されることが多い。

では、「ムカサリ絵馬」以外に「冥婚」「死者結婚」と呼ばれている習俗はどのようなものであるのだろうか。以下に主要なものの概要を記述する。

・中国:「冥婚」

中国においての死者結婚は「冥婚」などと呼ばれる。櫻井徳太郎はこの習俗の動機について、家系継承の妥当性を擬制婚によって正当化しようとするとし、未婚の死者と過継子との問題を挙げている。また、中国人の死霊観・民俗信仰についても触れ、障りや祟りに対して行われる慰撫のための鎮魂儀礼であることを指摘した(櫻井 1987:525-528)。

この習俗は山西省や広東省、江蘇省、陝西省、河南省などの農村に分布し、現代でも行われている。起こりは少なくとも漢代以降と考えられ、『周礼』などにその記述がみられる。「冥婚」の儀式では結婚式のように家族などが参列し、会食を行い、花嫁の遺骨を花婿の遺骨とともに合葬する。その後、合葬された死者たちは「夫婦になった」とされる。供え物があり、シャーマンの関与がある(櫻井 1987他)。

「冥婚」は死者の合葬が習俗内に組み込まれている。つまりこの習俗を行うためには死者の遺骸が必要であるが、運良く手に入らないことも多い。そのため、盗掘や遺骸の闇取引などが社会問題になっている。

・韓国:「死んだ(人の)婚事(チュグンホンサ)」「死後結婚(サーフアキヨルホン)」

韓国における死者結婚は「死んだ婚事(チュグンホンサ)」「死後結婚(サーフアキヨルホン)」と呼ばれる。

この習俗では未婚の夭死者、事故死者同士を結婚させることで死後の冥福を祈る。「巫堂(ムーダン)」と呼ばれるシャーマンが関与し、花嫁、花婿のための案山子を用意して巫儀を行う。供え物があり、結婚の儀式を行い、実際に二人は結婚したということになる(崔 1993他)。

近年では近代化の影響などによって過去の遺物と化しつつあり、関連する習俗の「死霊祭」と共に都市部ではほとんど行われなくなっているという。しかし、「魂(幽霊)を結婚させる習俗」として知っている者もいる他、関わりの深い祭礼である「死霊祭」は地方ではいまだ見られることもあるという 。

・日本(青森):「花婿・花嫁人形」

青森県の死者結婚では「花嫁・花婿人形」を奉納する。当習俗は青森県内の四つの寺院を中心として行われており、最も古いのは津軽地方木造町、(西の)高野山とされる。この西の高野山における人形奉納の起こりをさかのぼると起源を昭和30(1955)年ごろに見ることができ、終戦後に戦死者の親族が花嫁人形と息子の遺影を持参して奉納を依頼したのが始まりであるという。

当習俗が一般に普及したのは昭和47(1972)年ごろで、寺

院側が布教宣伝をしたのではなく、民間巫者のオガミヤサンやイタコに言われて人形を持ってくるようになった。そして、寺院側もそうすることが仏の供養になると親族に説いたため、奉納が増えたのである。

当習俗では遺影と共に男ならば花嫁、女ならば花婿の人形を奉納する。この人形は購入できるものであり、名付けてから奉納する。この時、基本的には（親戚の中に実在する名前などを避け）周囲の人々に何の支障もない名前を付けるが、死者に思い人があった場合はその人名をつけることもある（その相手がすでに結婚しており幸せな家庭を営んでいるものは信条として除外する）。「ムカサリ絵馬」のように名前に関する禁忌などは今のところの調査では見つかっていない。また、花嫁（花婿）人形は1体１万円以上するものもあり、比較的高価であるため、住職の勧めにより家によっては絵馬を奉納する所もある。

昭和40（1965）年と昭和57（1972）年にNHKが西の高野山の花嫁人形供養の実況を放映してから県外からの奉納が増え、ムカサリ絵馬同様に日本全国から奉納者が訪れるという（高松 1993）。

「ムカサリ絵馬」は婚礼の様子を描くために必然的に新郎新婦両名が描かれている。しかし、絵馬に書かれた人物については、どちらか（新郎もしくは新婦）の名のみが表記されていることが一般的であり、供養対象となる死者については記されていても相手に関しては記されていない。小田島は松崎が調査を行ったムカサリ絵馬の描き手と加えてもう一名の描き手に聞き取り調査を行い、両者から「死者は（写真を依頼者から預かり）似せて描くこともあるが、死者の相手はイメージで描く」と述べられている（小田島　2007：157-158）。

また、今日のムカサリ絵馬奉納には、存続に不可欠な要素としての「シャーマン」や、片方が特定の生者である、もしくは特定の実在する（実在した）人物であることを示すような兆候は希薄である。小田島はこの点をもって現在みられる「ムカサリ絵馬」は櫻井や松崎が描くところの「冥婚」の枠組みからは漏れるとした（小田島 2009：20）。

志賀は「ムカサリ絵馬」を所蔵する寺院関係者へ「実際に結婚したことになるのかどうか」という聞き書き調査をおこない、その結果をもとに、この習俗は死者供養の一環であると結論付けた。そこで、筆者はまた違う視点からアプローチをかけてみようと思う。そもそもの前提として、架空の伴侶と死者を結婚させた絵を描き奉納する「ムカサリ絵馬」は「結婚」の定義の内にあるのだろうか。日本国語大辞典第二版（2001）で「婚姻」を引くと、「①男女が性の結合を基礎として、夫婦共同の生活を継続的に営むこと。また、その関係に入る法律行為。婚姻適齢にある男女双方の合意のほか、一定の方式による届け出をすることによって成立する。②親戚となること。また、①によってできた親戚。姻族。」とある（佐藤2001b）。

レヴィ＝ストロースはインセストタブーを特定の範囲の女性との性交渉を禁止することによって女性を交換する規則であるとしている。それを受け、田川玄は初めから交換する主体として親族や家族が成立しているのではなく、禁止することによって交換の主体としての家族と親族が作り出され、一定の範囲の性交渉の禁止の規則を伴う結婚という制度によってこそ、親族や家族という集団が生まれ、同時に社会全体が作り出されていることとなる、としている（田川 2005:62-65）。

つまり、「結婚」は人間関係を繋げ、広げ、配偶者を中心として起こる姻族的つながりによって、社会的ネットワークを構築するための役割を持つ行為であると定義することができる。

本来の語としての「冥婚」である中国の死者結婚では死者同士を合葬させ結婚式を行うことで遺族同士が関係者となり、つながりが生まれるものもあった 。「冥婚」における辞書的定義の引用をもって先述したように、死者を合葬したのちその遺族同士が親戚づきあいを行うため、これは実際の「結婚」の定義に沿っていると解釈できる。

対して、「ムカサリ絵馬」奉納習俗は生者を描いてはならないとされる「禁忌」の有無を除外するとしても、死者の伴侶には架空の人物を描くことが原則となっている。そのため、姻族関係による人間同士の関係は広がらず、「結婚」という行為の本来の役割をはたしていないともいえる。「ムカサリ絵馬」奉納習俗では遺族が自分と死者を慰めるために、「人生の中で最も幸せな瞬間」の表象として結婚という概念を用いているに過ぎないからだ。「ムカサリ絵馬」における「結婚」の重要性、立ち位置については志賀も自身の調査結果から同様の指摘を行っている（志賀 2009）。

以上の点から、中国由来であり、かつ、死者同士を合葬、結婚させる本来の「冥婚」習俗や、人間関係の拡充と社会形成を目的とされる「結婚」行為の定義は死者に架空の伴侶をあてがう「ムカサリ絵馬」奉納習俗とはかけ離れていると言えよう。よって、前述したように娯楽化された「ムカサリ絵馬」、ないしその奉納習俗の見出しとしてよく用いられる

「冥婚」「死霊婚」という語は、本来であれば「ムカサリ絵馬」奉納習俗を表す語として用いるのは不適当である、というのが筆者の所見である。

なお、フィクションの世界では「死者と生者が結婚する説話」は古くからままあり、これも娯楽化された習俗の一形態と言える。フィクションとして娯楽化された「ムカサリ絵馬」の場合は「生者を描くと死者に連れていかれる（から描いてはならない）」という「禁忌」の側面を取り上げて誇張し、信仰や供養としての面はほぼ省かれている。

（2）「ムカサリ絵馬」奉納習俗の「特異性」に対する疑問と反証

先述したように、「ムカサリ絵馬」は山形県村山地方の死者供養習俗である。供養を行うに至る感情や理由は様々であるが、特に儀式などを行うわけではないため、故人の冥福を祈ることが目的の普遍的な死者供養習俗であると言えよう。しかし、先行研究などの中では当習俗を「独特な習俗」という視点から論述しているものが多い。

ここで見えてくるのは内から見る実際の習俗と外から観察した習俗観の乖離、そしてそこに生まれる差異である。何故同じ習俗を見ているにも関わらず、ここまでの差異が表れるのであろうか。

志賀裕紀は論文『山形県村山地方のムカサリ絵馬について―「独特な習俗」観への疑問―』の中で、「ムカサリ絵馬についての先行研究などの記述において、先行研究の視点や先入観を打破しムカサリ絵馬習俗の実証的な基礎研究となることを目的に論を展開している（志賀 2010:226）。

詳細な調査内容は割愛するが、志賀は自らの調査を経て、

①「少なくとも昭和50年代から現在のムカサリ絵馬奉納習俗に関しては山形県村山地方に「残る」習俗ではなく「新しい習俗が発生した」という視点で考察するべきである。」

②「ムカサリ絵馬習俗とは死霊結婚の習俗というよりも元々山形県村山地方にあった死者が希望していたであろうことを思い絵馬に書き奉納する習俗の一部にすぎず、それは亡くなった人のために好物を仏壇に供えるとか棺に入れるなどという行為と共通の心情があるように筆者には思える。」

③「東北は独特である、他地域にはない不思議な習俗が残っているだろうというような先入観もしくは期待が少なからず存在したからではないか。実態は違うというのに、ある東北の習俗について<特殊である>という説明がなされ納得されているというのは、ムカサリ絵馬以外の事象に関してもあるのではないか。」

と結論付けている。また、志賀は追記の中で、若松寺の住職が述べた「今年はムカサリ絵馬奉納習俗が何故か少ない」という印象をうけ、「つまりは平成16(2004)年と状況が変わっている。習俗の変容は続いているのである。」としている（志賀 2010:204-205）。

櫻井は「ムカサリ絵馬」を含む東北各地の死者供養絵馬掲額について、「つまり亡者に対する肉親の憐憫の情をあらわす以外の何ものでもないのである。その度合いが、いとけない乳幼児であり適齢期の若者であった肉親を対象としたために、一入強いものとなったのである。だから、この点から眺めてみれば、基本的には日本の民間で広く行われる死者供養の一般的儀礼と少しも変った所がない。」と述べている(櫻井 1987:434-435)。

以上の点から、元々「ムカサリ絵馬」は「冥婚（死霊婚）」としての性格は薄く、さらに現代に至っては「冥婚」を形作る要素の一つである「シャーマン（オナカマ）の介在」も少なくなっており、故人やその遺族の気持ちを慰め、死者を悼み、その冥福を祈る習俗へと変化していることがわかる。また、シャーマンの介在の減少は霊を降ろすという段階がなくなり、奉納者が描いてもらった絵馬を直接奉納するようになることによって霊的な仲介を必要としなくなったことを意味している。つまり、少なくとも近代における「ムカサリ絵馬」の立ち位置は特殊な「冥婚（死霊婚）」の習俗ではなく、ごく一般的な供養習俗とさほど変わらない、供養の一形態であると考えることができる。

小田島は「ムカサリ絵馬」や花嫁・花婿人形が死者を供養するために奉納されることは奉納者が供養すべき死者、それも「結婚」という表象に据えることによって供養されえる死者を念頭に置いているであろうことを指摘しており、さらに「結婚」が表象するものには従来の研究の焦点にもなってきた「相続」や「継承」のみならず、現代日本においては「幸せ」という抽象概念までもが含まれると述べる。

以上の先行研究から、「ムカサリ絵馬」は櫻井などが調査したかつての「シャーマン（オナカマ）によって導かれる死者の結婚式」から、シャーマンが介在せず、絵馬の奉納によって死者の冥福を祈る死者供養へと移り変わっていることがわかる。そして、少なくとも筆者の調査した範囲では死者の心残りを晴らしたい、せめて彼岸では幸せになってほしい、何も

してやれなかったと悔やむ遺族の胸のつかえを取り払いたい、など、根底にあるのは一般的にみられる死者供養の習俗類と変わらない感情であり、極端にかけ離れている、飛び抜けて特殊であるといったような傾向は見られない。また、志賀の聞き書き調査結果などを見る限り、死者の「結婚」や結婚の儀式を行うこと、結婚することによって得られる姻族関係や既婚者という立場に特別執着している様子もこと近年にかけてはなく、死者の冥福を祈り、独り身で死んだその無念を慰めるという方向の話が多い(志賀 2010他)。

先述したとおり「冥婚」「死者結婚」を「シャーマンの口寄せなどによって降ろした死者の結婚習俗」と定義するのならば、この点から見ても「ムカサリ絵馬」奉納習俗はその枠を外れていることとなる。「死者の結婚した姿を描き奉納する」という行為自体も、かつて写真が貴重だった時代に行われた遺影の代替物であると見ることができよう。これは時代と共に遺影の合成写真によって作られた「ムカサリ絵馬」が表れたことからもわかる。絵に描くことが重要であるのならば、合成写真を用いた絵馬ではなく、その写真を元に描いた絵馬が作られるはずである。

このことから、一般的なイメージとして持たれている「ムカサリ絵馬はこの地方にのみ存在する特殊な習俗である」という言は、「死者の望むことを絵馬に描き奉納する習俗が東北地方には広く分布している」という前提を省かれ、その中の一つであった「死者の結婚を描き奉納する」という点が誇張され、「ムカサリ絵馬」というこの絵馬のみを指す名を得て、存在感が独り歩きした結果と言えるだろう。

3．何故「ムカサリ絵馬」は怖い話となったのか

（1）「ムカサリ絵馬」をモチーフとした作品

本項では実際に「ムカサリ絵馬」をモチーフとしている、また、したと推測されるフィクション作品を例に挙げ、その内容や特徴などから類型化と傾向の分析を試みる。

・『黒鷺死体宅配便　8』「ロマンス」「僕は死なないだろう」「ラブソングはいらない」（2008年）

この作品は先述したとおり、口寄せ能力を持つ主人公など特殊な力を持つ5人が望まぬ形で死を迎えた遺体の声を聴き、報酬と引き換えにその願いを叶えていくホラー漫画である。また、この発表年はあくまで単行本のものであり、実際に本誌に掲載されたのはさらに前であることに留意したい。作者は原作が大塚英志、作画が山崎峰水。出版社は株式会社角川書店。発表年は平成20（2008）年で、媒体は漫画である。

この漫画の中では「ムカサリ絵馬」を「ムサカリ絵馬」と表記しているが、本来禁忌であるものを「呪い（殺される）」と表記する、当習俗を青森県（津軽地方）のものとするなど、実際の「ムカサリ絵馬」奉納習俗とは（設定上の）相違がみられることを念頭に置かねばならない（松崎のように青森にも「ムカサリ絵馬」があると述べている者もいる）。これが実際の習俗を意識した上で意図的に行われた描写であるのかどうかは不明である。しかし、もしこれが意図的なものではなく、創作者の調査不足から来るものだとしたら、こうして間違った習俗観が再生産される危険性についても考える必要があるだろう。

本作品内に現れる「ムカサリ絵馬」は新郎新婦のみを描いた記念写真型であり、新郎新婦の名前、死者の没年、生者の没年、「奉納」「死後結婚」の文字が入っている。死者、生者共に俗名であり、描かれた人物は本人に似せて描かれている。絵馬は長方形の板絵馬、額装されたおそらく紙絵馬の二種類が見られる。青森県から東京へ移築された「由緒ある」絵馬の奉納先であった寺院に絵馬をかけることにより、呪殺の効果が発動し死者が生者を殺しに向かう。本作品で実際に発動した描写のある絵馬は二枚だが、どちらも女性の生者が狙われ、死者の親、弟が奉納者である。奉納者は死者の思いを遂げるためにそれぞれの思い人である生者の写真を用意し、絵馬に描くよう依頼している。また、この際の生者の殺害方法は「足を掴んで階段から落とす」「背後から首を絞める」など死者による積極的な関与である。

また、この話の中では結婚プランナーの男が死者供養の一環として「冥婚式」を行っている。つまり、話のテーマとしては「ムカサリ絵馬」を用いているが、物語中での「ムカサリ絵馬」は「冥婚式」を行うにあたり生きている人間を殺すための手段・呪具として使われていることに留意する必要がある。

・『世にも奇妙な物語』「死後婚」（2008年）

当作品はフジテレビによって製作され、平成20（2008）年9月に放映されたホラー番組「世にも奇妙な物語」シリーズの中のひとつであり、演者は深田恭子、高橋ひとみ等。脚本は中村樹基、演出は高丸雅隆。媒体は実写映像（DVD）である。

この作品は「主人公は本来死後婚（見合い）の相手ではなかったが、死者に気に入られたために命を狙われ、死者同士

でしか行うことができない死後婚の代わりに生きたままムカサリ絵馬に描きこまれる」という特徴を持つ。

本作品内に現れる「ムカサリ絵馬」は二つあり、片方は姉と見合いで死後婚する予定であった男の親が奉納しようとしたもの(絵馬A)。こちらは主人公に叩き割られ、未遂で終わっている。もう片方は話の中で死亡した主人公の恋人の親が奉納したもの(絵馬B)であり、主人公の死因となったのはおそらくこちらの絵馬である。どちらも五角形の木絵馬に新郎新婦のみを描いた記念写真型であり、新郎新婦共に無個性な顔に描かれている(そのため、この話の中では絵馬に名前を描きこむことが禁忌のスイッチと思われる)。絵馬には生者、死者の没年(+享年?)と名前が記入されており、死者、生者共に俗名である。絵馬は寺院ではなく死後婚の仲介を行った老婆の家の裏山の中に野ざらしで奉納されている。絵馬の奉納者はどちらも死者の親であり、絵馬Aの奉納者は失った我が子の幸せのために生者を描きこむ狂気的な人物として描かれている。絵馬Bの奉納者は悪意こそないように見えるが、こちらも主人公の許可なく絵馬を作成し、生者の姿を描きこんでいる。この話の中で主人公は最終的に階段から落ち死に至ったような描写をされている(実際に死亡したかは不明)が、死者は瀕死の主人公を見下ろすだけであり、直接手を下して死に至らせたような描写はされていない。

・2ch「ムサカリ」(2012年)

これは所謂「都市伝説」と呼ばれる形であり、現代における怪談の一種である。「都市伝説」はその名の通りビルや病院など無機質で近代的な空間、地域をモチーフに語られるが、近年では「ムサカリ」「八尺様」「姦姦蛇螺」のように田舎などの風習、祟りをテーマとするものも増えている。作者は匿名掲示板のため不明。出典はネット掲示板2chの「何でもいいから怖い話を集めてみない?」と題されたスレッドであり、最古のものは2012年05月31日に書きこまれている。掲示板、まとめ系サイトにおける都市伝説「ムサカリ」のはしりと推測でき、これを転載したものも多い。

この話は「ムカサリ絵馬」をベースにしたと考えられるが、風習の名前が「ムサカリ」となっている。また、今回媒体となっているのは絵馬ではなく合成写真である。これは時代とともに風習が変化し、奉納に用いられる媒体も多様化したことが反映されていると考えられる。また、この都市伝説は第三者視点で描かれており、持ち帰った写真がその後どう使われたのか、本当に死んだ女と絵馬に描かれた女が同一人物だったのかなどに関しては触れられない。

本作品内に現れる「ムカサリ絵馬」は男女一組を納めた合成写真である。死者は紋付き袴姿の男、伴侶はその思い人である女性である。写真には死者の名前と相手の女性の名前を同姓にして入れ、絵馬にしやすいようパネルにして両親に渡している。その後奉納されたのか、死者が手を下して死んだのか、などは不明である。

・『ホーンテッド・キャンパス　死者の花嫁』(2013年)

これは小説を媒体とする「ムカサリ絵馬」の娯楽コンテンツ化事例である。ジャンルはオカルトミステリとなっている。作者は櫛木理宇、出版は株式会社KADOKAWA。

この作品の特徴は、「ムカサリ絵馬」が原因で描かれた人間が死亡しているが、呪詛的な力で殺されたわけではないということである。死んだ大叔母のもとで起き続けた怪異減少は戦死した長男の弟がかねてから好意を抱いていた彼女に懸想して起こした事件だった。つまり、実際に死者が迎えに来たのではなく、死者の振りをした生者によって「死霊に取りつかれた女」という噂が流れ、それが原因で病みやつれ死亡したのである。本作品は実際にこの大叔母が血縁であるメインヒロインに憑依し、主人公に「自分が描かれた絵馬を見たい」と頼む場面がある。つまり、フィクション的要素として「生者に干渉する死者」の描写、世界観設定があるにもかかわらず、呪詛なものとしてではなく、あくまで「悪用された供養習俗」という形で「ムカサリ絵馬」を描写している。また、「正式な「ムカサリ絵馬」ではなく聞きかじった中途半端な知識による奉納」という点を加味している。

「どれも一様に、華やかな婚礼衣装をまとった花嫁と花婿が仲むつまじく並んでいる図柄だった。」とあることから、この絵馬も男女一組が並んだ記念写真型と推測することができる。絵馬には死者の戒名、生前の名、享年などが記されている。奉納場所は藪の中の古びた観音堂であり、奥の厨子に黒ずんだ観音像が安置されている。その周囲には寄進された千羽鶴などと共に絵馬が飾られ、絵馬は木に書かれたもの、剥き出しのもの、額装されたもの、合成写真などである。本作品の核となるくだんの絵馬は遅筆な筆であり、人間の顔は没個性だが名前が記入されている、と描写されている。奉納者は死者の両親であり、死者の思い人であった生者の名を本人の許可なく勝手に描きこむ利己的な人間として描かれている。

・『ほんとにあった！呪いのビデオ　67～69』「禁忌」（2016年）

本作品は平成11（1991）年から続くホラー・オリジナルビデオ・シリーズである。発売は平成28（2016）年、製作は株式会社ブロードウェイ・株式会社パル企画、NSW。配給は株式会社ブロードウェイ。媒体はVHS,DVDなどの実写映像。

このコンテンツは今回調査した作品の中で最も「心霊番組」系統の色が濃い作品である。この作品中では「未婚のまま死した者は怨霊となるため、冥婚という儀式を経ることで祖霊の仲間入りを果たすことができる」とされている。

中国の冥婚についても触れられているが、その説明では「亡くなった新郎新婦同士、ムカサリ絵馬の場合は、亡くなった人と、架空の人物で行い、生きている人を使うことはタブーである。生きた人を使うと、亡くなった冥婚相手と同じような死に方をする、死者に引きずり込まれるという風に考えている人もいる。」とある。また、この作品は製作過程でスタッフが都内の神社に依頼し、完成品にお祓いを受けさせていることが明言されており、フィクションを作る側にも祟りを恐れる心がある様子が伺える。

本作品に現れる「ムカサリ絵馬」は合成写真であり、男女一組の記念写真型である。モザイクがかかっているが、合成写真の横に俗名、戒名、あるいは奉納日など、何らかの文言が書き添えられているのが確認できる。男性の写真は素材に顔だけをはめ、女性は「二十代後半であること、奥ゆかしく清らかであること、男性経験が無い、処女であること」を条件に探してくれと絵馬作成者側に依頼されており、生者である女性の写真は本人の許可なく用いられている。奉納者は死者の親、ムカサリ絵馬は奉納者の家に共に保管されている（寺院などに奉納されたのかどうかは不明）。奉納者である母親は狂気的な人物として描かれている。また、本作品の中では処女や未婚のまま死んだ者が悪霊になるのを防ぐための風習だったとされている。

・『冥婚の契』（2018年）

「ムカサリ絵馬」をモチーフとしたフィクションはアマチュア創作なども含めるといくつかあるが、『冥婚の契』は出版物や漫画サイトに所属する作品群の中では最も新しい作品であろう（本論文を執筆した2018年時点）。作者は詩原ヒロ、配信元はマンガボックス。配信開始年は平成30（2018）年。媒体はweb漫画である。

本作品では意図せず絵馬に描かれてしまった教師の男の視点で話が進む。作品中では「冥婚絵馬」とされており、「伴侶を得ずに亡くなった者を弔うため、絵馬に架空の人物との婚儀を描き奉納する風習。故人の成仏や死後の幸せを祈る遺族の想いを込め描かれる絵馬だが、そこにはひとつの“禁忌”が存在した。“実在の人物を絵馬に描くと、その者は冥界に連れて逝かれる”――。」と説明されている」。しかし、未婚の男女の結婚式を描いた絵馬を奉納する」「生きた人間を描いてはいけないという禁忌が存在する」「登場人物たちの口調に山形県内の訛りが見られる」「登場人物手ある地元の名士の娘の名字が〈最上〉である」などの点から、元になったのは「ムカサリ絵馬」であると推測できる。

また、劇中で「ムカサリ絵馬」を保管する住職が発する「お許しください…あなたがいると皆が惨禍に晒されるのです…」というセリフから、少なくともこの作品の中では生者が描かれたムカサリ絵馬は描かれた生者本人だけではなく、その周囲の人間にも危害を及ぼす不吉なものとして認識されていることが伺える。

本作品に登場する絵馬は新郎新婦を描いた額入りの紙絵馬である。絵馬には生者と死者の名前が記入されている。奉納者、描かれた死者、死者と生者との関係は現在（2018/12/03）の時点では不明である。また、「奉納」の文字があり、災いを防ぐための封印を施したうえで寺のお堂に管理されている。

（2）コンテンツ化された作品を通した所見

■「ムカサリ絵馬」の（ホラー）娯楽化に関する議論

金田明日香は「なぜムカサリ絵馬は「怖い話」として広まったのか」という論文内において、「ムカサリ絵馬」がホラーコンテンツとして娯楽化された理由を考察している。そして、実際に「ムカサリ絵馬」を題材として用いた作品としてテレビ番組の『世にも奇妙な物語　秋の特別編』「死後婚」、漫画の『黒鷺死体宅配便』と『山寺グラフィティ』、「Web幽」というサイトで発表された小説の『死後結婚』を例に挙げ、この四つを分析することで「ムカサリ絵馬」と「怖い話」の相関関係を探った。

金田は論文で近年、供養の習俗であったムカサリ絵馬が「怖い話」として広まっているとし、「怖い話」を怖いと感じることが想像力の影響であるならば、「その想像力によって、ムカサリ絵馬は『怖い話』に変化したのではないだろうか」という仮説を立てている。そしてその理由として「ムカサリ絵馬」の「禁忌」が「怖い話」を作る絵で生かしやすい要

素であることを指摘している(金田 2010:146)。

また、「ムカサリ絵馬」を怖い話足らしめるもう一つの要素として遺族が亡くなった人間の幸せを願う気持ちを挙げ、その念が強調されることにより「怖い話」に変質する、としている。金田は遺族の気持ちが強調されることによって、自分の家族が幸せになればいいという利己的な面が表出し、ムカサリ絵馬に生者を描くという禁忌を無視してしまうとも述べた(金田 2010:149-150)。

金田は「怖い話」を好んで見る層には若者が多いと推測しつつ、「ムカサリ絵馬」がテレビ番組などで発信され、一般に認知され、怖い話が集中的に作られた時期も2000年代であるとしている。その一方で、正確な「ムカサリ絵馬」の情報が一般に認知されていないことも指摘している(金田 2010:151)。

■コンテンツにおけるムカサリの特徴

まず、共通点として「禁忌は必ず破られる」というものがある。創作物のストーリーを組む時にはいくつかパターンがあるが、一般的なのは序破急や起承転結であろう。ホラーコンテンツにおいて求められるのは、その名の通り「ホラー(horror,恐怖)」であり、この感覚・感情を得られるように構成が練られ、ストーリーが作られる。

「ムカサリ絵馬」とその禁忌を題材に構成を書く場合、作者が最も描きたい山場は「禁忌を破って絵馬に描かれた生者(被害者)」と「生者(被害者)に降りかかる不幸」であり、その傾向は先述した六つのホラー作品にも顕著である。つまり、ホラー娯楽コンテンツに「ムカサリ絵馬」を用いる際は「禁忌を破り不幸が訪れる」ことを前提、目的としており、「不幸が訪れるから描いてはならない」とするとする実際の習俗、それらに関わる人々とは真逆の思考になっていると言える。そして、本来「こういう災いが起きるから行ってはならない」とする禁忌の本来の効果が「これを行うと災いを起こすことができる」というように逆説的かつ効果的な舞台装置として用いられているのである。

これには「ムカサリ絵馬」の「描かれた生者が死者に連れていかれる」という禁忌が深く関係している。この禁忌の特徴は、描いた人間ではなく、描かれた人間が被害をこうむるという点である。少なくとも、筆者が調べた範囲内のホラーコンテンツとして娯楽化された「ムカサリ絵馬」の話では禁忌を破って生者を描いた者(絵師・写真家)、禁忌を破っても目的の達成を望んだ者(奉納者・依頼者)には何も起きず、(同意のあるなしに関わらず)描かれた者だけが死んだり取り殺されたりしている。そのため、「ムカサリ絵馬」に使用するための合成写真を作った男が語り手とされる都市伝説「ムサカリ」のように、語り手が死なない形で話を進めることもできるという点でもストーリー作りに都合のいい設定であるとも言える。

日常生活を生きる人間が想像も理解もできないような超自然的な力で無残に殺される理不尽さや恐怖を楽しむのがオカルトホラーであるのならば、恐怖を与えることが作品の第一目標である。「ムカサリ絵馬」を用いたフィクションによるオカルトホラーの目指す最終目的、その恐怖の形は「自分の知らない所で起きた原因からなる呪詛的かつ理不尽な死」であるため、やはり描かれた生者を生還させる理由はあまり見つからない。

そもそも「ムカサリ絵馬」自体に能動的に人を呪い殺す力はないため、説得力の補填として『黒鷺死体宅配便』『冥婚の契』のように、(本人の意思か操られているのかは別として)生者を己の伴侶と認め執着するなど死者にキャラクター付けが行われる。もし生還するならば『黒鷺死体宅配便』のようにさらに強い力を持つ超自然的存在によって打ち払うか、死者の怨念や執着を取り払う方に向かうと思われる。

しかし、実際の習俗では本当にあの世で結婚したかどうかはわからないが、あの世で結婚したと思うことによって遺族の気が晴れる、慰められる、程度の認識である。生前に死者がよほど結婚したいと嘆きながら亡くなり、それを元に奉納者が禁忌を破るならまだしも、『黒鷺死体宅配便』『ホーンテッドキャンパス』『ムサカリ』『死後婚』ではあくまで死者が生者を思っていた、婚約の予定があった、死者は対象に気があったらしい、などというものであり、最終的に優先されているのは死者の意思ではなく、「こうすれば我が子が喜ぶだろう」と思う奉納者たちの意思である。『ほんとにあった！怖い話』に至っては親が我が子のためにこんな娘がいい、処女がいい、などと条件を付けて花嫁探しを行っていたような描写もある。

つまり、作品の描写を見る限り、これらのフィクションにおいて「禁忌」を破る行動に至った根本は明確に死者自身の意思で現れた願い・怨念・執着ではなく、親が我が子を思う気持ちとそれによって他者を害することもいとわない歯止めの利かなさである。

かつての「ムカサリ絵馬」奉納を勧める「オナカマ」や中国における「冥婚」には、未婚の夭死者はその無念から祟りや障りを成すために慰めてやる必要がある、という考えが

あった。しかし、金田が述べたように、これらの作品において誇張・強調されているのは遺族の死者への強い思いが暴走した利己的な面である。この点においても、フィクションにおいて描かれる「ムカサリ絵馬」は慰霊より「禁忌」とそれを破ったことに現れる恐怖（＝死）を重要視していることが推測できる。

以上の点から、「ムカサリ絵馬」が持つ「禁忌」という属性（設定）は、「冥婚（死霊結婚）」と並び、当習俗が娯楽化されるようになった原因のうち、最も大きいものの一つであると考えられる。

なお、現在出回っている「禁忌」の文言としては「生きた人間を絵馬に描くと死者によってあの世に連れていかれてしまう」だけであり、描いた絵師やそれを頼んだ奉納者がどうなるかについての記述はない。「自分の知らないところで自分を害する何かが行われている」という点では呪詛の在り方と酷似しており、本来人を害する力を持たない「ムカサリ絵馬」が他人を呪殺する道具のように用いられる描写が多いのはこの側面のためであろう。

では、金田が「ムカサリ絵馬」が「怖い話」として用いられるもう一つの理由、ないし要素として挙げた「遺族が亡くなった人間の幸せを願う気持ち」はどうだろうか。先述したように、ホラー作品の中で描かれる「ムカサリ絵馬」の奉納者は「絵馬に生者を描くとあの世に連れていかれる（＝死ぬ）」ことを知った上で、「我が子や家の体裁のためなら他者が不幸になってもいい」といったような考えを持つ、いわば「悪人」としての性格・キャラクター付けをされた者が多い。

対して、志賀や小田島など、実際に習俗の調査を行った結果を見る限りでは、死者の相手はイメージで描くことや、絵馬に描かれた人物についてはどちらか（新郎ないし新婦）の名前のみが記載されていることが一般的であることなどが述べられている（小田島 2009:20ほか）。そして、特に現代型の「ムカサリ絵馬」を奉納した遺族たちには、そもそも「生きた人間を絵馬に描く」という考え自体がないように思われる。これは禁忌の側面もあるが、まず「ムカサリ絵馬」というのは死者の相手に架空の人物を描くことが原則であり、「そうする（原則を曲げてまで生者を描く）理由がない」ためであろう。

そもそも、死者の伴侶として描かれる人物に関する記述が少なく、実在の人物を描いたかどうか自体も定かではない。また、櫻井徳太郎はシャーマンが（口寄せで）死者の心境と意中の相手を語り、遺族はその結婚相手（生者）を探して「冥界結婚」させるとの見解を述べている（櫻井 1987:439）ため、この「冥界結婚」習俗では生者を死者の伴侶とする縁起の悪さより、死者を慰めその無念を晴らすことに重きが置かれていたと推測できる。近年新たに作られる絵馬はオナカマの導きではなく、寺院の説明や口コミによって伝わったものであるため、「生者を描いてはならない」という漠然としたルール（「禁忌」）が「ムカサリ絵馬」に関わる価値観として再生産されていることも原因の一つであろう。

つまり、金田の言うところの「（死者に対する遺族の気持ちを強調した）利己的な面」は、「ムカサリ絵馬」が「怖い話」になった原因というよりは、「描いたら死ぬとわかっていて生者を描きこむ遺族は他人の被害より我が子の利益を優先する性格に違いない」と話を引き立たせるためにゆがめられ、新たに作り出された「設定」であると言えるだろう。

また、「ムカサリ絵馬」関連の創作物で生者を迎えに来る死者にはあまり生者に執着するような描写は見られない。というより、先述したように生者が怯える、死ぬ様子を丁寧に描写する割に、死者自身が結婚を望み、あの世に能動的に連れて行こうとするような描写が少ないのである。

『黒鷺死体宅配便』と『冥婚の契』では死者が積極的に生者を婚姻の相手として取り殺そうとしているが、『死後婚』では足を滑らせて転落した主人公を静かに見下ろすだけ、『ムサカリ』では語り手の知らないところで描かれたものが死んだために、死んだ女が描かれた本人かどうかもわからず、死者が女の死を誘発する描写もない。『禁忌』は合成写真を作った本人が依頼に来るため絵馬に描かれた生者＝今回の事件の死者（正確には自殺未遂だが話の最後に死亡する）とわかるが、実際に死者が取り殺したのかどうかはわからない。『ホーンテッド・キャンパス』では描かれた本人が幽霊として登場するが、「ムカサリ絵馬」に描かれた死者は登場せず、彼女を衰弱死させた原因も死者の振りをした生者とそれを「死者にたたられた女」と思い込んだ周囲の当たりの強さ、という現実的なものとなっている。

■ホラーを作る側から見る

文化人類学を学び、現在は漫画家である都留泰作は「〈恐怖〉はまさに日常の裏側、内部と外部の境界の膜にぴたりと張り付いている。」(都留 2015:56)と述べ、恐怖の在り方とそれが求められる理由を論じている。

都留はエンターテイメントと日常の乖離について、「エンターテイメントの世界観は日常とかけ離れればかけ離れる

ほど面白いと感じてもらえるとも言われ、イメージだけの世界観が独り歩きしているようにも見受けられます。でもそれを文化人類学の視点からもう一度見てみると、実はいうほどかけ離れることはできず、特に受け手は自分か所属する文化に縛られている、という印象です。」とも述べている（都留 2015:60-61）。

また、三田村信行は『子どもの本棚』に収録されている「怖い話のことなど」の中で、「怖い話」を怖いと感じる原因を見えないものに対する想像力の働きとして明確に述べている（三田村 2008:29）。このことから、金田は「怖い話」を集めた本やテレビの影響で想像力はむしろ広がり、その想像力によって「ムカサリ絵馬」が「怖い話」に変化したのではないかと推測している（金田 2010:146）。

4．人間にとって恐怖とは何か

「ホラー」とは英語で恐怖を意味する「horror」からきた語である。日本語では、転じて映画や小説などの娯楽作品、かつ観る者が恐怖感を味わって楽しむことを想定して制作されているジャンルの作品の総称とされている。「ホラー」と似た作品ジャンルとしては「サスペンス」「オカルト」「スリラー」「ミステリー」などがある。

これらは近い概念であり、時として同じような意味を含むために複数のジャンルが混成されたものや明確に分類できない作品も少なくない。「ムカサリ絵馬」をモチーフにしたホラー作品は、生者に干渉する死者という「超常的なもの」を用い、「恐怖をあおる」作りになっているため、あえてジャンルを定義するならば「オカルト＋ホラー」の要素を持っていると言えるだろう。

都留は日本製ホラー作品（Jホラー）のもつ怖さに関して境界への鋭敏な警戒心と恐怖心をあげている（都留 2015:61）。

（1）風習・恐怖の娯楽化に関する意識調査

本アンケートは2018年10月下旬ごろに東北芸術工科大学にて行った意識調査である。対象は某授業をとった学生（18～22歳頃）を中心とし、有効回答数は191であった。質問と回答の項目、その結果は以下のとおりである（表１）。

今回アンケートを行った対象は主に大学生（18～22歳）であり、女性が多かった。

表 1恐怖に関するアンケート

Q1	あなたの年齢は？
	10代：56%　20代：43%　30代：1%
Q2	あなたの性別は？
	男：32%　女：64%　それ以外：3%　不明：1%
Q3	あなたの出身地は？
	山形（村山地域）：18%　山形（村山以外）：11%　東北：41%　それ以外：29%　不明：1%
Q4	あなたはムカサリ絵馬という風習を知っていますか？
	知っている：11%　少し知っている：15%　知らない：72%　不明：2%
	どこで（この風習を）知りましたか？
	ノンフィクション：12%　伝聞：34%　地元の風習である：6%
	フィクション：6%　SNS：9%　その他：30%
	この風習について知っている内容を簡単にお書きください（自由回答）
Q5	あなたは「ホラー」と呼ばれる番組や「怪談」「都市伝説」と呼ばれるようなコンテンツが好きですか？
	はい：46%　どちらでもない：25%　いいえ：28%
	どのくらいの頻度で見ていますか？
	頻繁に：24%　時々：47%　たまに：28%　不明：1%
Q6	見ているときに恐怖を感じますか？
	感じる：73%　感じない：25%　不明：1%
Q7	それは何故ですか？（自由回答）
	本能的恐怖：42%　想像的恐怖：49%　その他：9%
Q8	これらのどのような点を面白いと感じますか？また、それは何故ですか？（自由回答）
	恐怖：32%　作品性：26%　好奇心：38%　その他：4%
Q9	これらを見る、もしくは見ようとするときの感情に最も近いものはどれですか？（複数回答可）
	怖いもの見たさ：34%　興味：44%　スリルを味わいたい：17% 見ない方が怖い：1%　その他：4%
Q10	「これは本物である」「身の危険を感じる」と思うようなホラー作品、「都市伝説」を見たことがありますか？
	ある：30%　ない：60%　不明：10%
	それはどのような作品でしたか？（自由回答）
	『リング』『呪怨』『エクソシスト』『パラノーマルアクティビティ』など
Q11	「ホラー」と呼ばれるコンテンツが嫌い・苦手な理由があればお書きください
	本能的恐怖：25%　想像的恐怖：30%　その他恐怖：29%　恐怖以外：16%

東北芸術工科大学は山形県にあるため、東北出身者が7割を占めている。その為、「ムカサリ絵馬」の認知も他県に比べれば比較的高いことが推測できる。知った理由の「その他」の中には後述する山形ビエンナーレや、大学の授業の講義などがあった。風習について簡単な記述を求めた項では「未婚のまま亡くなった人を供養するために絵馬に描き、死後の世界で結婚させてやる」といったような回答がほとんどであり、生者を描いてはならないとされる「禁忌」を知っているのは筆者の中間発表を聞いていたと思われる1名のみであった。

今回行ったアンケートの範囲ではホラーコンテンツを好む者が最も多く、頻度としては「時々」が最も多かった。このことから、今回のアンケートに回答した若者たちは、ホラーコンテンツに対して興味を持ち、進んで摂取する傾向があることがわかる。

Q6～Q10はQ5で「はい」と回答した者に続けて回答するよう指示した項目である。自由回答の内、Q7では「理由はわからないが恐い」「演出が生理的に苦手」といったものを「本能的恐怖」、「自分に置き換えて想像してしまう」「主人公に感情移入してしまう」といったものを「想像的恐怖」、そのどちらでもないものを「その他」と定義した。また、Q8では「スリル」「どきどきする所」といったものを「恐怖」、「演出や演者の演技」「話が面白い」といったものを「作品性」、「普段の生活では味わえないことを味わえるところ」「知らないこと

や驚きを感じることができる」といったものを「好奇心」、どれにも属さないものを「その他」とした。

このうち、Q6～Q9の結果を見ると、ホラーを好んで見る者の7割は視聴の際に恐怖を感じており、その恐怖を面白いと感じていた。これはまさに後述する「忌避されない恐怖」であり、本来ならば嫌がり逃げるべき恐怖を進んで楽しんでいる状態である。また、Q9の結果ではホラーコンテンツを摂取するときの動機が興味からなっていることが多いことがわかる。これも後述する「興味化」の影響であり、興味をもって対象に近づくことで、好奇心が恐怖を上回り、結果的に克服している状態にある。

しかし面白いのは、Q11の結果である。こちらの本能的恐怖、想像的恐怖などの分類もQ7に準じており、恐怖を感じてはいるがどちらにも分類しがたいものは「その他恐怖」、「そういったものを見ると寄ってくると注意されていたから」「メリットがわからない」といったものは「恐怖以外」としてある。こちらにも「想像してしまうから怖くて見られない」「思い出して夜眠れなくなる」という回答があり、どちらも想像力から生まれる恐怖である。どちらも恐怖の根拠が同じである以上、その恐怖を楽しむことができるQ7の回答者たちとの違いは、ホラーコンテンツを見た本人が恐怖を超えるほどの興味、好奇心を供えているかといえるだろう。

Q10は恐怖を感じるホラー作品を見たことがあるか、それはどういった作品であるか、などを調べるための項であり、都市伝説系から洋画、邦画、テレビ番組系、youtube動画等、多岐に渡った。

これらの結果から、ホラー系コンテンツには想像力によって生み出される恐怖のほか、いきなり恐ろしい映像や画像、音などで驚かせ本能をあおる恐怖が含まれていることと、想像によって生まれた恐怖を楽しむことができる者とできない者がいることが分かった。

（2）恐怖の構造と現象学的心理学―「忌避されない恐怖」とホラー愛好者

恐怖の中には「忌避されない恐怖」というものが存在する。忌避される恐怖には死や苦痛などが、忌避されない恐怖としてはホラーコンテンツや絶叫系と呼ばれるようなアトラクションなど、自ら進んで恐怖を感じ、それを楽しむようなものが挙げられる。恐怖という感情とその構造に関しては、心理学者の山根一郎が2007年に「恐怖の現象学的心理学」という論文で取り上げている。

山根は恐怖の克服に関し、恐怖感情から脱するにはまずは恐怖対象から遠ざかる（逃避）・近づかない（回避）という行動的対処方法があるとした。しかし、恐怖対象との力の優劣関係を逆転するという方法（大胆・勇気）もあり、一般的には心身の成熟に応じてはこちらの方法をとるのが望ましいと分析した（山根 2007:9）。これらの行動的解決の他に、他の感情（対立感情）に置き換えるという方法もある。本来なら恐怖するに値しない恐怖対象に対して有効である。具体的には、対立感情への転化すなわち「安心化」と「興味化」が考えられる。安心化は、恐怖対象に対する認知を変える、例えば客観的に危険でないような恐怖する根拠がないことを認識すれば成立する（恐怖症を除く）。興味化は、好奇心が恐怖心より強くなる場合である。恐怖体験を楽しむ行為にもなり、恐怖の快感化という奇妙な現象さえ導く。

と言ってもこれは人類に広く観察できる現象でもあり、遊園地のお化け屋敷やジェットコースターが人気ある理由である。これらは真の危険ではなく、危険をシミュレートした体験であり、危険と同じ体験でありながら当人には真の危険でないことが理解されている。これを「忌避されない恐怖」と呼ぶ。山根はこのような現象は、逃避したい恐怖対象は潜在的に興味対象となりうることを示唆している、としている（山根 2007:9）。

「ムカサリ絵馬」をモチーフとしたホラー作品群で恐怖の対象となるのも現世に現れる死者、つまり幽霊である。しかし、その中に現れる死者には直接的にしろ、間接的にしろ、生者をあの世に連れて行こうと危害を加えている者もいる。その点では、死者が現世に現れるという「異様」に死者が生者に直接干渉するという「異様」を重ねた状態であるともいえるだろう。

すべての生き物は本能的に恐怖を避けるようになっている。それは「死」に対する本能的恐怖であり、自分の身を守るための防衛反応でもある。では、何故人間の中にはホラーコンテンツや絶叫系アトラクションなど、進んで恐怖を味わい、そのスリルを楽しもうとする者がいるのだろうか。この謎を解き明かすための鍵となるのが「忌避されない恐怖」である。

人間は危険を伴った非日常体験が目的ではなく、純粋に恐怖だけを体験したがる。むしろこちらの方が実際の危険を伴わないだけに安直に体験でき、嗜好者の数も多い。ホラー映画・怪談・お化けなどを好む現象がそれである。この現象が我々に教えることは、現実の危険がなければ、恐怖感情（逃げ出したいという気持ち）は必ずしも不快ではなく、むしろ我々は率先して恐怖を体験しようということ、しかもその体験は恐怖の克服という自己成長的な価値を持たな

い純粋な（消費的）娯楽として、である。

山根はこの恐怖と忌避される恐怖との違いについて「楽しまれる恐怖は、忌避される恐怖と内容（素材）が異なっている必要はない。つまり対象としての意味内容での違いは必要なく、明白な違いはわが身に危険が及ぶかどうかである。危険が及ばない恐怖とは恐怖場面に直面してはいるものの、自分は安全な観察者であり、その恐怖対象は本質的には自己には向かってこない場合である。」（山根 2007:21）と述べている。

都留の言うところの「エンターテイメントの皮を一枚めくればそこにある日常」とは、フィクションと思っていた怪異が、その薄皮を破ってこちら（日常）に襲い掛かってくる怖さである。しかも、彼らは非常識的、超自然的な能力を持っていることもあり、単なる筋力などでは太刀打ちできないケースも多い。ありえないはずのものがありえ、ありえないはずのことが起き、しかもそれらが自分の命を害する恐怖。それを想像してしまった時、またはその状況にある登場人物に感情移入してしまったとき。人はフィクションの「ホラー」に恐怖を感じるのだ。

また、恐怖というものは段階的に変化する性質を持ち、特定の行為を行うことにより乗り越えることが可能であると山根は述べたが、この現象は筆者の中でも起こっていた。筆者は最初に『黒鷺死体宅配便』の「ムカサリ絵馬」回を見たとき、怖いと感じなかった。これは「ムカサリ絵馬」の奉納という習俗をよく知らず、無知ゆえにホラー界隈では「よくある話」の一つと認識していたためである。つまり、無意識に「安心化」をしていたと言える。

次に感じたのは畏怖である。実存するムカサリ絵馬を実際に見た瞬間、言いようのない感覚が這い上がってきたことを今でも覚えている。また、そうして興味を持ったのち、友人と共に立石寺を訪れ、堂内の「ムカサリ絵馬」を観察した。静かな堂内にひっそりと掲げられる「ムカサリ絵馬」からはやはり言葉にできないような畏れを感じ、筆者は確かに興奮交じりの恐怖を感じていた。

そして、様々な資料を読み漁るうちに、この習俗が死者の冥福を祈る気持ちから作られていること、よく取り上げられる属性としての「冥婚」「死霊婚」より死者供養に近いこと、実際にホラー漫画のような使われ方はしていないことなどを知り、「忌避する」という意味での恐怖はほとんどなくなった。いまだに畏怖は残るものの、どちらかといえば興奮に寄っており、「ムカサリ絵馬」と奉納習俗そのものに対する恐怖より好奇心の方が勝っている。これは筆者の中で「ムカサリ絵馬」に対する恐怖の「興味化」が行われたためである。

このように興味をもって対象を知れば、恐怖を乗り越え克服することができる。つまり、「ムカサリ絵馬」がホラー・オカルトのように扱われたとしても、正しい知識を得ることによって「興味化」や「安心化」が行われれば「ムカサリ絵馬」は呪詛じみた恐怖の対象ではなくなる。本来の習俗としての「ムカサリ絵馬」が広く認識されていれば、正しい認識とフィクションとしての創作部分を分けて考え、両立しながらその存在を保ち続けることができるのである。

（3）「見えないもの」と娯楽としての「忌避されない」恐怖

まず、「ホラー好き」を自称する人間には2種類がいる。「怖いから見る」タイプと、「恐くないから見る」タイプである。

筆者は所謂「（ホラーが）怖いから見られない」人間である。その理由は様々あるが、その最たる理由は「自分の安全が担保されていない」と感じるためだ。ホラーや恐怖を楽しむ人間としてはあくまでフィクションなのかもしれないが、「いつか自分にもこういったことが起きるかもしれない」「絶対の安全などありえない」と感じ、フィクションとわかっていても夏の心霊特番やホラー映画などを見ることができない。

「恐怖」と「想像力」に関しては作家の三田村信行が「怖い話のことなど」の中でこう述べている（三田村 2008:28-29）。

「近代の合理主義は、非合理な闇への恐怖やおびえを駆逐してきました。また、物質的にも、都市に氾濫する照明が闇を薄っぺらなものにしてきました。そうした精神的物質的な合理主義の発達は、大げさにいえば、取りも直さず想像力の枯渇に繋がっていったように思われます。すべてを合理的に解釈できれば、そこに想像力が介入する余地はないのですから。」

一方で、曹洞宗総合研究センター発行の『葬送儀礼と民俗』では、現代の葬祭文化について以下のように言及されている（曹洞宗総合研究センター編 2013:12-13）。

「現代の葬祭文化にとって、極めて深刻なのは、人々が死後の世界について明確なイメージを持てなくなったこと、また死者の意味付けが十分にできなくなったことでありましょう。」

「死者と死者の行き先についてのイメージがはっきりしなくなりますと、死者をあの世に送るための儀礼である葬祭の意味も弱くなるであろうことは疑いのないことでしょう。死者やあの世に関する宗教的世界観に対する現代人の疑義や軽視の傾向は、さらに具体的な疑義となって仏教者に提示されております。葬祭の意味、葬祭の必要性などです。」

「死者は、僧侶が行う一連の儀礼により、〈来世〉に安定し、〈先祖〉となり、〈ほとけ〉になるという人々の宗教的通念にもとづく葬祭は、伝統的な民俗社会の〈しきたり〉として存続してきました。しかし、伝統的な地域共同体が崩壊の度を増し、伝統的な〈しきたり〉がゆらぎだすにつれ、当たり前であった葬儀のありようが問われだしたのです。」）

ここにもまた、「イメージ」「伝統的な〈しきたり〉のゆらぎ」という言葉があり、「葬祭問題が側出する大都市部」という現象を殊更に煽るメディアや危機な情報の拡大への危機感が宗教の要である寺院側にもあることがわかる。しかし一方で、（少なくとも曹洞宗では）地方の寺院における伝統的な葬祭や地方習俗はほとんど変化することなく営まれているともある。

「ムカサリ絵馬」を「怖い話」「都市伝説」とする向きはそもそもどこから始まったのであったか。「都市」である。『黒鷺死体宅配便』『ムサカリ』『死後婚』の舞台も現代の都市であった。つまり、曹洞宗総合研究センターの言うところの「死者やあの世に関する宗教的世界観に対する現代人の懐疑や軽視の傾向」を持つ者が多い場所を舞台に、年月とともに積み重なった信仰のある習俗を持ち込み、実際の習俗が持っている「信仰」「供養」「死者への思い」という属性などとは異なる、「恐怖」という文脈の中で誇張して描いているのだ。

特筆すべきは、三田村が「ホラー」を子どもと子どもの心を持った想像力豊かな大人のための文学であるとしている一方で、曹洞宗では所謂「若者の宗教離れ」の原因を想像力の減少、欠如にあるとしている点である。金田は三田村の現代では想像力が枯渇しているという論に対し、むしろ想像力は広がっていて、それによって「ムカサリ絵馬」が怖い話に変化したのではないかとしている。だが、筆者の行ったアンケート結果を見る限りでは「ホラー系コンテンツが好きであり、恐怖を感じる」という者と「想像してしまって怖いから見られない、嫌い」というものが同時に存在していた。

つまり、アンケート結果からわかったのは、結局想像力の有無や恐怖を感じるかどうかに関わらず、ホラーを好むものは好み、嫌がるものは嫌がるということだった。想像力によって恐怖を掻き立てられることと、それを嫌がるかどうかは別の問題、と言い換えてもいい。そして、信仰心が想像力、もしくは曹洞宗総合研究センターの言うところの死や死後の世界などを明確にイメージする力によって養われるのであれば、ホラーの好き嫌いを問わず、怖いと感じる若者たちには信仰心がある、もしくはこれから芽生え、養われていく余地があると言えるだろう。

そのため、「怖い話を好むかどうか」と「現代の若者に信仰心、想像力があるかどうか」を同じ枠で語ることはできず、この二つに関連性を見出そうとする場合も慎重に行うべきだろう。

日本人は先進国として生きるうちに、「死」という生の対極に位置する最も根源的な恐怖を遠ざけ、隠して生きるようになったと感じる。現代ではその傾向がことさらに強くなっている。

だからこそこういった「忌避されない恐怖」が面白がられ、好まれ、生産される。あくまで自分の命に危険がない、安全な状態で、死者の姿を通して、生きている自分の生きている実感を得ることができる。または、死を身近に感じないからこそ想像力の中で脚色された死やそれに付随する恐怖が膨れ上がっていく。

このことから、死の恐怖を進んで感じようとするという行為は、社会によって覆い隠され、意識の外に追いやられて久しい死を想像し、意識し直すための行為ととらえることができる。

5．現代の「ムカサリ絵馬」

（1）ムカサリ絵馬の現在

2018年9月1日から24日にかけ、山形市内を会場にアートイベント、山形ビエンナーレが行われた。

このイベントは東北芸術大学が主催し、山形市で2年に一回行われる現代アートの祭典である。今回は累計3回目の開催であり、開催テーマは「山のような」だった。特筆すべきは、このイベントの一つとして行われた展覧会、「山のような100ものがたり」である。この展覧会は東北芸術工科大学キャンパスを会場として行われ、その展示物の一つとして「ムカサリ絵馬」が用いられていた（写真1）。

写真１　山形ビエンナーレにおける「ムカサリ絵馬」の展示風景
撮影：根岸功　提供：東北芸術工科大学
Photo : Isao Negishi　From TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

展示ではハタユキコ、狩野宏明が描いた現代アートの「ムカサリ絵馬」ともに、久昌寺から借用し、応急処理を行った

実物の「ムカサリ絵馬」を展示した。

本項では、この山形ビエンナーレ内展示「山のような100ものがたり」とそこに組み込まれたムカサリ絵馬、そして当展示に関わったキュレーター三瀬夏之助氏、修復師大山龍顕氏、絵馬を貸し出した久昌寺の聞き書き調査結果を元に、現代における「ムカサリ絵馬」の在り方やこれからについて考察する。調査内容としては「〈ムカサリ絵馬〉やその奉納習俗を残したいと思うか？」「〈ムカサリ絵馬〉がなくなるとしたらどんな時か？」「ホラーとしての〈ムカサリ絵馬〉や（生きた人間を描いてはならないとされる）〈禁忌〉を知っているか？」等の質問を交えながら各人の「ムカサリ絵馬」に対する考えなどを聞いた。

・キュレーター、三瀬夏之介氏

三瀬夏之介氏は日本画家であり、本展示のキュレーターである。

本展示を行った経緯を問うと、まず東北大学が2010年に行った「ムカサリ絵馬」の展示に衝撃を受けたこと、実際に朽ち行く絵馬を見て絵を描くということについて考えた事、自分が担当した社会人向けのデッサン講座に

「ムカサリ絵馬を描くために絵の勉強をしたい」という女性が来たことなどを述べた。

久昌寺から借用した絵馬群の展示方法に関しては実際に久昌寺で飾られているように高いところに角度をつけてインスタレーションを考えながら配置し、その下には親族が描いたもの、絵師「眞華」が描いたもの、合成写真、油絵を並べバリエーションを表現しているということだった(写真2)。

こういった宗教的、信仰的なものを扱うには倫理の問題が伴い、時には冒涜的とされることもある。その点に関して尋ねると、

「今回はアンケートを用意し、そういった意見があれば言葉を尽くしてこういう理由があるとか〈今の山形を考えることは山形だけではなく日本の現状を考えることである〉と丁寧に対応しようと思っていたが、結果的にクレームは一件もなかった。」と答えた。

「〈ムカサリ絵馬〉を残したいか？」という問いに対しては「もちろん残したいが、お堂の裏で朽ちていく姿も美しいと思った。役目を終えたら土に還り、それがまた別の何かと織り合わされていく。この価値を保存していくのもあるが、今の人が別の価値を乗せていけるはずである。」と述べた。

「ムカサリ絵馬がなくなるとしたらどんな時か？」と言う問いには「習俗としてはなくなったとしても、どこかにその役目がスライドしているか誰かが代替しているのではと思う。鎮魂の問題をだれが行うか、という話である。風習がなくなったからと言ってその概念や鎮魂を願う思いがなくなるわけではない。」と答えた。

ホラーとして扱われる「ムカサリ絵馬」や「禁忌」に関しては知らなかった、そんなものがあるのかとのことだった。

写真２　山形ビエンナーレにおける「ムカサリ絵馬」の展示風景
撮影：根岸功　提供：東北芸術工科大学
Photo : Isao Negishi　From TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

・修復家、大山龍顕氏

大山龍顕氏は東北芸術工科大学に所属する修復家である。久昌寺の「ムカサリ絵馬」の他、多くの文化財修復に携わっている。

ムカサリ絵馬に関するホラー作品は『世にも奇妙な物語』を見たことがあり、ムカサリ絵馬の「禁忌」に関しては知らない、聞いたこともないとのことだった。また、目的が全く違うため、そんなものは元々ないと思うと述べ、そういった習俗として広まるか広まらないかは人の感じ方によると思う。墓が立っているだけで恐いと思う人もいるししょうがないと言えばしょうがない、と語った。

「ムカサリ絵馬」が怖がられる理由としては、「古くてボロボロで用途などがわからないものが暗いお堂に密集していれば大体怖いのではないか。」とも述べ、保管状況やそのあり方によって印象が変わることを指摘した。

また、「ムカサリ絵馬」のフィクション、コンテンツ化に関しては、

・「（ムカサリ絵馬を）面白いとは思う。一点一点を見ると絵画的には拙いが、久昌寺のように集まっているところが面白い。」

・「これは、習俗として残してもらいたいかというのとはまた別の問題である。この習俗は不幸が起こらなければ残らない作品であり、それが悲劇を背景にしている分、肯定しづらい部分もある。しかし、その在り方を否定するからと言って作品まで否定しなくてもいい。絵馬自体はこれまで積み重なってきたものであるから大切にしてもいいし、風習としては普通に結婚した祝いに変化してもいいと思う。」

とのことだった。

「〈ムカサリ絵馬〉を残したいか？」という問いに対しては、

・「作品としてならば、仕事なので残す。」

・「自然に朽ちていくのは別として、寺に奉納された絵馬がお焚き上げされるということに関してそれが悪いか、と言われると判断ができない。」

と答えた。

「ムカサリ絵馬」の修復と継承については、

「〈ムカサリ絵馬〉は他の絵画作品とは意味が違うため、一点残すことにはあまり意味がないように思う。一点ずつ物理的にやるというよりは調査を行う時に修理も一緒に行う、くらいでなければ難しいだろう。」と述べた。

・上山市、馬野山久昌寺

馬野山久昌寺は上山市に位置する曹洞宗の寺院である。当時院は現代における絵馬の奉納こそないものの、明治～昭和に描かれた70数点の「ムカサリ絵馬」（写真3,4）を所蔵し、研究者の調査などにも協力を行っている。また、先述した大山龍顕氏に「ムカサリ絵馬」の修復を依頼した縁から、本展覧会への絵馬の貸し出しを了承した。

本展示への貸し出し経緯に関しては「以前に東北大学の展示があり、その時にも貸し出したのでどういったことを行うのかはわかっていた。ムカサリ絵馬を知らない人が多いため、広く知ってもらいたかった。（大学の人間は）とても丁寧に扱ってくれる。実物を見てもらうことが大切だと思っている。」と語った。

久昌寺に現在絵馬の奉納がなく、途絶えた経緯に関しては筆者の「オナカマの減少がムカサリ絵馬の消滅につながるのではないか、という先行研究もあった」という言を踏まえ、「まずはそういうもの（ムカサリ絵馬）を描く画家がいなくなったことだと思う。また、戦後になって早死にする子どもがいなくなったことも関係しているだろう（久昌寺に納められている絵馬は幼い子供のためのものが多い）。これは

写真３　久昌寺所蔵の「ムカサリ絵馬」

（住職の）私見であるが、久昌寺に納められているムカサリ絵馬は古い時代のものが多く、写真などが手に入らなかったため、亡くした子どもをなんらかの形で残したいという思いと最も幸せの絶頂である結婚式を子供にさせてやりたいというおもいから、結婚式の姿で絵馬に残してやりたかったのではないか、と思う。（筆者の話を聞いて）シャーマンである〈オナカマ〉の減少だけが理由ではないと思う。その可能性もあるかもしれないが。」と述べた。

「自分にもし同じような不幸が起こった場合ムカサリ絵馬を納めたいと思うか？」という質問には「そうは思わない」と答え、「(久昌寺の)ムカサリ絵馬奉納習俗を復活させたいと思うか？」と聞くと「思わない。昔知恵遅れで亡くしたきょうだいの絵馬を奉納したいといった檀家がいたが、絵馬を書ける人がいないので現代でも絵馬の奉納がある若松寺を勧めた（4, 5年前）。若くて亡くなる人もいないため絵馬の需要がなく、芸工大の先生に〈学生に絵馬を書かせてはどうだ〉と勧めたこともある。今寺院にあるものに関しては残していきたいが、新しい奉納に関しては考えていない。」と答えた。

「ムカサリ絵馬がなくなるとしたらどんな時か？」と言う問いには「全国に宣伝すれば若松寺のように全国から若くして子を亡くした親が奉納しに来るだろうが、若くして亡くなる子どもが大

写真４　久昌寺所蔵の「ムカサリ絵馬」

幅に減少した現代では基本的に需要がない。絵馬は写真がなく、死者の姿を残すことが難しかった時代に子どもの姿を最も幸せな姿で残したいという思いからできたものであると思っている。その代わりとなる（死者の姿を残すことができる）写真などがなくなれば絵馬が必要なくなるのではないか。」と述べた。

「ムカサリ絵馬」がホラーの題材に使われていることや「禁忌」の存在は知らなかったと答え、「禁忌」に関しては「知らない。そんなルールがあるなんて聞いたこともない。常識の範囲で描こうと思わないとは思う。そもそも古い絵馬であるためどういった絵馬であるのかなど詳しいいきさつが不明である。5～6名の絵師が描いているため、多少の違いはあるがどれも似たような顔をしており、似せて描いたのかなどはわからない。そもそも（久昌寺の）絵馬には死者、奉納者の名前は書くが伴侶の名前は書かれていないか。」ということだった。

「ムカサリ絵馬」のホラーコンテンツ化事例に関しては「ホラーの題材に使われていることを知らなかった。ものの見方は十人十色であり、純粋な人はこの幸せを願って絵馬を奉納するが、同じもの（絵馬）を見てホラーを作るのはものの見方の違いであると思う。特にいい、悪いとは思わない。絵馬が怖いと思うのは死を連想させるからだろう。

しかし事実は事実であり、曲げてはならないものである。ホラーが世に広まることにより、ムカサリ絵馬が『恐ろしい』『呪い』など事実を曲げて伝わる、定着するのは良くないと思う。」と述べた上で、「本物があり、それを知って初めてフィクションができる親が子を思う気持ちが込められたムカサリ絵馬を、フィクションによる間違ったイメージが先行した状態で歪められたくはない。

ムカサリ絵馬の本来の習俗、遺族の思いがあったからこそそれを元にしたフィクションができた。ちゃんと本来の習俗を知った上で読んでほしい、作ってほしい。」と習俗としての「ムカサリ絵馬」を知り、絵馬を保持する者として習俗が歪められることへの危機感を語った。

（2）習俗と娯楽―作られた「禁忌」の可能性

まず、「禁忌（タブー）」という言葉自体の定義を行う。『日本国語大辞典第二版』には「さわりのあるものとして忌みはばかられる物事への接近・接触を禁ずること。病気・出産・死などの状態に関するもの、食べ物、方角、日時に関するものなどさまざまな形のものがあり、一般に、違反者は超自然的な制裁を蒙るものとされる。さわり。タブー。」とある（佐藤 2001a）。

藤井正雄は1979年に出版された『講座日本の民俗7　信仰』に収録されている「禁忌・呪い」にて、禁忌という語は兆・凶によって推測される不測の事態を招きやすい行為を避け、禁止する習俗を指すとし、これを犯すと超自然的な制裁が伴うと信じられている個人的感覚を含めての社会的習俗の総称として用いられているとしている（藤井 1979:178）。

いずれにしろその共同体の共通理解として「してはいけないこと」があり、それを行えば本人ないしその共同体に制裁や災厄が降りかかるということは共通しており、これが最低限の定義と言えるだろう。

しかし、「ムカサリ絵馬」における禁忌によって害を被るのは、絵馬に生者を描きこむことを依頼した奉納者ではなく、実際に絵馬を描いた絵師でもなく、絵馬に描きこまれた生者本人である。「絵馬に描かれた生者は死者に連れていかれる」という「禁忌」は科学的に考えれば迷信の域を出ず、もしその通りに生者が死んだとしてもそれを死者のせいと明確に立証することは不可能である。だからこそ、『黒鷺死体宅配便』で生者を描きこんだ「ムカサリ絵馬」を依頼した親たちは法に触れないとの説明を受けて安心し、『死後婚』で主人公の命を付け狙った母親は最終手段として絵馬を用いた。

生者を描きこんではいけないという「禁忌」に対し、描きこんだ絵師やそれを依頼した奉納者に何のデメリットもない以上、奉納者がこの「禁忌」を破らないために必要なのは己の倫理観や良心のみである。つまり、この「禁忌」は破ることによって共同体や自身を襲う危険を回避するための不文律、という大義名分を持っていないことになる。

ならばこれは誰に対する「禁忌」なのだろうか。そもそも、「禁忌」としての条件を満たしているのだろうか。この矛盾した条件は、誰のためにあるものなのだろうか。

これはあくまで仮説にすぎないが、この「禁忌」は櫻井徳太郎の言うところの「死者の写真や肖像画を個人と共に並べて結婚式をさせてやる」といったような風習を行ったところ、その相手が死んでしまったという偶然から生まれた縁起の悪さに「禁忌」という誇張された尾ひれがついた結果生まれたものなのではないだろうか。

共同体の崩壊や崩壊を招くような致命的な被害を避けるために共同認識として作られるのが「禁忌」という規律ならば、その認識はその共同体の中で共有されるべきものである。

今回の場合、その共同体とは「ムカサリ絵馬を納めるなどその習俗に関わる者達」と「ムカサリ絵馬奉納習俗が存在する地域」となる。ならば、この禁忌とは「描かれた生者が死者に連れていかれて死ぬから描いてはいけない」というもの

ではなく、「もし描かれた生者が死んだ場合、描くことを望んだ遺族がその因果関係を疑われ人間関係が険悪になるなどして共同体に不和が生まれるから描いてはいけない」というものだったのではないか。

現代ではニュースやフィクション、口コミなどによって全国から奉納されている「ムカサリ絵馬」だが、本来は志賀などの聞き書き調査結果にもあるように、山形県村山地方を中心とする一部地域のみで行われる習俗であった。その為、死者の恋人が近くに住んでいることもままあっただろう。

当該地域のように近所の家同士のつながりが深い地域であれば、誰々が死んだ自分の子供とまだ生きているその恋人の結婚式をしていたぞ（もしくはしていたのではないか）という話も伝わりやすい。そんな状態でその恋人がなんらかの原因により死んだとあれば、突然我が子を失った悲しみに耐えきれない家族などはその原因を探す。その時にこの絵馬がその理由にならないように、そういった疑いを避けるように、このような「禁忌」が生まれたのではないだろうか。

以上の「禁忌」の定義や当習俗のある地域背景から見るに、「ムカサリ絵馬」に存在するとされる「禁忌」を破った際の現実的な弊害は「描かれた生者の死」ではなく、「描かれた生者が死んだ場合、その因果関係に付随して引き起こされる共同体内の不和」であると思われる。後者ではなく前者の文脈がフィクションで取り上げられやすいのは、偏にこの習俗をよく知らない者か、習俗そのもののアイデンティティを無視できる者がこの習俗をネタにしてストーリーを作っているためであろう。

そのため、死者が生者を連れていく（殺す）ことに重きが置かれ、死者が生者を殺す非現実性の辻褄を合わせるためにオカルトホラーになり、遺族は「死者のために禁忌を破り生者を描きこむ利己的な愛情を持つ人間」という歪んだ描写をされ、習俗に込められた思いや歴史ではなく死者に怯える生者ばかりが描かれる。

例えフィクションであるとしても、その非現実の裏には現実があり、積み重ね、守ってきた人々がいる。実際に存在する習俗をモチーフに用いる以上は、そのことを今一度自覚する必要があるだろう。

また、久昌寺住職の話や、小田島の絵馬に描かれる人物は架空の人物であるゆえに新郎ないし新婦の名のみが記載されていることが一般的であるという言（小田島 2009:20）から推測するに、死者の伴侶に名を与えるという行為自体が近年生まれたものか、少数派であったことが伺える。合成写真ではない「ムカサリ絵馬」には人物が本人に似せて描かれているものと絵師の手癖が強くどれも似たような顔をしているものがあるが、後者は名前を併記しなければ誰を描いたものであるかわからない。そのためこの禁忌自体が死者の伴侶に名前を付けるという行為に付随して生まれた可能性もある。

少なくともフィクションに用いられる「ムカサリ絵馬」はどれも男女一組の記念写真型であり、久昌寺に奉納されているような三三九度の婚礼を描いた絵馬は確認されていない。

筆者の父が撮影した「ムカサリ絵馬」（写真5）には伴侶である花嫁の名前が記載されているため、男女一組の記念写真型の「ムカサリ絵馬」への描画様式の変遷とも関係があるのかもしれない。

写真５　伴侶に名の入った「ムカサリ絵馬」
（寒河江市満福寺、筆者撮影）

6. おわりに

つまるところ、「ムカサリ絵馬」という習俗は、内実を知らない創作者にとっては題材としてネタにしやすく、魅力的で、不思議で、独特な習俗のように見えているのだろう。筆者も創作をする側の人間であるため、確かにこの習俗には魅力を感じる。日本画家である三瀬氏も創作者としてこの習俗の魅力を言及していた。しかし、実際の習俗やそれにまつわる内実を知って創作するのと表面の情報だけを掬い取り誇張して世に送り

出すのでは、習俗に対する向き合い方に大きな隔たりがある。実在する習俗を根底におくのならばなおさらである。今回この論文のために様々な事柄を調べるにあたり、「この作品はフィクションであり実際の団体、習俗などとは関係ありません。」という言葉が免罪符のように扱われていると改めて感じた。

フィクションは時として現実を侵食し、習俗や文化など不確定な概念を固定して一つの解釈に塗り替えていく力を持つ。金田は想像力によってムカサリ絵馬が怖い話に変化したとしていたが、筆者はそれに加え「知識のなさ」「認識の薄さ」「習俗自体に対する興味のなさ」もあるだろうと考えている。

「ムカサリ絵馬」をモチーフとした作品では奉納者が直接手を下すことより最終的に絵馬の力で描きこまれた生者がどうにかなるような展開に持っていこうとする動きが強いように思える。なぜなら、ただ生者を殺し死者の伴侶に添えてやるだけなら「ムカサリ絵馬」である必要はない。創作の題材として「ムカサリ絵馬」を用いる作者は、あくまで「ムカサリ絵馬」の習俗とそれに付随する「禁忌」の力をもって生者を殺したいのだ。つまり、生者を殺すオカルトホラーの手段として用いられていた「ムカサリ絵馬」の「禁忌」そのものが目的にすり替わっている可能性がある。創作者たちはテーマとして「ムカサリ絵馬」を扱いたい割にその中身には興味がないか深く調査していない。または浅いところの情報、性質だけをなぞり、残りは想像によって補完し利用している。ともすれば習俗を知った上であえて誇張、捻じ曲げを行い世に送り出しているということにもなる。

だが、結論として筆者は「ムカサリ絵馬」奉納習俗をコンテンツ化することに関しては完全な反対でも賛成でもない。研究者の視点からすれば間違った形の習俗が広がり、面白がられて娯楽化されることには憤りを覚えるし、久昌寺の住職もその点に関しては複雑だと述べていた。つい先日も、twitter上で「ムカサリ絵馬」を冥婚として紹介したユーザーと少しやり取りをした際、「ムカサリ絵馬」自体をフィクションとして捉え、実際の習俗ないしそれを元にして作られた寓話だったことに関しては知らなかった、というようなことを言っていた。これは、多少なりとも新たな形の「ムカサリ絵馬」概念がインターネット上に一種のコンテンツとして分布しており、それがある種の存在感と説得力をもって存在している証左と言えるだろう。

だからこそ、この流れ自体が「ムカサリ絵馬」とその奉納習俗が生き延びるためのある種の生存戦略となっているとも言える。フィクションとして「ムカサリ絵馬」を用いる人間は、そのほとんどがこの習俗から離れたところにいる。つまり、時代や伝統といったものに縛られることがなく、いつでも情報としての「ムカサリ絵馬」に触れることができるのだ。

「習俗が忘れさられ、廃れ、失われていくのは若者の興味のなさが原因である」という言があるが、筆者もそのうちの一人だった。だが、フィクションとしての「ムカサリ絵馬」に触れ、そこから当習俗に触れ、興味をもって調べ、この論文を書くに至った。かつてインターネットが普及していない時代の人間、特にこの習俗が行われていた当該地域外の奉納者は、巡礼の際に絵馬の実物と対面し、心を動かされ、興味を持ち、奉納するようになった。これはいくつもの先行研究とその過程の聞き書き調査のデータによって証明されている。

現地に行かずとも、自分の興味のある対象を指先一つで探せるようになった現代なら、大量の情報の中から「ムカサリ絵馬」にたどり着き、興味を持ち、その研究者になることだって大いにあり得る。つまり、一見習俗を踏みにじっているように見える二次創作的なフィクションや創作物が、その元になった習俗の消滅を回避するための布石として働くこともあるのだ。

例えば、先述した山形ビエンナーレ2018では現代アートとしての創作「ムカサリ絵馬」が展示され、来場者がツイッターで呟く、Facebookで紹介するなど、現代ならではの情報の広がりを見せた。この事例は関連するアート作品が実際の絵馬と同時に展示されることによって人の目に留まり、習俗に対する興味を惹いたと言えよう。

そして、例え習俗としてのムカサリ絵馬自体がなくなったとしても、こうして再生産された新たな「ムカサリ絵馬」概念と本来の「ムカサリ絵馬」に関する資料が失われない限り、何度でも人間はこの習俗のことを思い出し、語り、ともすれば習俗自体を復活させることだろう。

櫻井徳太郎はかつて論文の中で「死後結婚式の挙行」、つまり「ムカサリ絵馬」奉納は「シャーマンの介在によって持ちこらえられた」と述べた（小田島 2009:11）。また、木村博は「この特異なる習俗も近い将来消滅するに違いない」と述べ、その理由を「戦後の信仰心の衰退である」とし、さらに「オナカマ（巫女）の激減である」としている（志賀 2010:226）。これはかつてこの習俗を題材として扱った研究者たちが「シャーマンの介在なしではムカサリ絵馬奉納習俗は成り立たない」「ムカサリ絵馬はシャーマンありきの習俗である」と認識していたと読み取ることもできるだろう。

しかし先行研究者の調査結果の通り、ムカサリ絵馬に関わるシャーマンとして挙げられていた「オナカマ」は現在活動していないかほとんど活動がない、もしくは表舞台から退いた存在とされる。それにも関わらず、ムカサリ絵馬の奉

納はいまだに続けられており、その理由はメディアの影響や実際に巡礼者が絵馬を目にし、風習に触れたことによる。つまり、「ムカサリ絵馬」を衰退させ、風習としての死を迎える原因はかつてから問題視されていた「シャーマンの不在、激減」ではない。もしくは「ムカサリ絵馬」がシャーマンの介在を必要としない習俗に変化したと言える。

また、ホラー概念化した「ムカサリ絵馬」にもその在り方に関わる問題がある。それは、この話を怖がるものがいなくなった時である。人間は身近でないもの、異質なものを理解しにくく、想像できない。つまり、我々が江戸時代の怪談を怖がらないように、この習俗が廃れ、その恐怖を知らないものがこの話を読んだところで恐怖を感じることはない。現に先述したように何も知らなかった頃の筆者は恐怖を感じなかった。

新たな価値を対象に付加するのは、価値観の違う現代人に合うように文化や習俗をアップデートするために大切なことであるが、それによって元の習俗が塗りつぶされてしまった場合、その価値観が適応されなくなればまた忘れ去られてしまう。そのため、現代向けに新たな価値観を付加する場合は元々あったものをただ書き換えるのではなく、昔からある「かつての人々の思いが込められた伝統的な習俗」の形と、「現代人に必要とされる新たな習俗の形」の両方が共に存在できるように、慎重に形作っていく必要がある。

以上の点から、「ムカサリ絵馬」も含め、風習や習俗が消えていく原因の一つには「価値観の変化と相違」がある。そして、実際とは異なる形で伝承・再生産される背景には「対象に対する認識（知識・認知）の不足」があることが浮き彫りとなった。「結婚＝幸せ」という図式が崩れればその価値観を元に発生した「ムカサリ絵馬」は廃れ、「恐怖」の価値観が変われば古い「恐怖」に基づいた怪談はファンタジーやSFのような自分たちの想像の及ばない世界、怖さを感じないただの面白い小話となる。

価値観とはその時代を生きる人々の死生観、暮らし、社会環境などを顕著に映し出す鏡のようなものである。もしもこの価値観の変化によって「ムカサリ絵馬」の奉納が減少したのならば、「信仰心や死者を思う気持ちがなくなった」という悲観的な見方と共に、「死者の結婚以外に、他に幸せを祈る供養の形が表れた」「ムカサリ絵馬に描かれるような未婚の死者が減少した」という見方もできる。

「ムカサリ絵馬がなくなるとしたらどういった時か？」という問いに三瀬氏は「なくなるというよりどこかにその役目がスライドするのではないか」、大山氏は「習俗を残すかどうかは所有者やコミュニティによる部分が大きく、修復家の自分には判断できないが、少なくともホラーとして面白がっているうちに（ものとしての）絵馬は劣化によって物理的になくなっていく」、久昌寺住職は「若い未婚の死者が減り写真が普及すれば、亡くした我が子の遺影としての役割を持っていた絵馬の需要はなくなるのではないか」と三者三様に答えた。そして、筆者は先述したように「結婚＝幸福」という図式の破たんだと考えている。これもどれかが正解という訳ではなく、各個人の価値観や立場にもとづいて「ムカサリ絵馬」を捉えた結果であると言えるだろう。

ここまで「ムカサリ絵馬」のいままでとこれからの可能性について述べてきた。もちろん、久昌寺の事例や先行研究にもあるように、「ムカサリ絵馬」という習俗を行う人が減少し、ついにはいなくなって、過去の遺物となる可能性もある。実際、「オナカマ」という重要な位置にあった存在の消滅と共に奉納が行われなくなった寺院があるのはれっきとした事実である。一方で、若松寺のようにホームページへの掲載や口コミによって今も奉納が続けられている寺院も存在する。これは、若松寺の「ムカサリ絵馬」奉納習俗が、「オナカマ」を必要としなくなった新たな形に変化した結果ととらえることができる。

これから先、信仰や宗教に馴染みのない世代の人々が習俗としては失われた「ムカサリ絵馬」に触れるとすれば、そのきっかけになるのはこれまで論じてきた本来の風習とはかけ離れ、独り歩きしている娯楽としての「ムカサリ絵馬」だろう。例え初めに触れたのが間違った情報であるとしても、筆者のようにそこから興味を持って調べたならば、必ずそこにある人々の気持ちや歴史、死者を悼む思いに気付く。そうして、また文化や習俗が復活し、次世代への継承が再開する可能性も大いにある。

2018年5月26日に半世紀ぶりに復活した「むかさり行列（山形県最上町赤倉温泉）」など、一度消えた祭りや習俗が復活した事例などからも、忘れ去られ失われたはずの文化の復活の可能性を見ることができるだろう。一度発生した習俗や風習はそれを行う人々がいなくなり、忘れられても、文献や口承などに残っている限りは完全に消滅するということはない。

特に、「ムカサリ絵馬」はいつか全員が行く道である「死」と残される遺族のための「供養」の習俗である。記録が残っていれば、人々が必要とした時にその時代に合った形で習俗は甦る。その為のとっかかりとして、「そういえばこんな習俗があったような」と思い出すためのきっかけとして、「ムカサリ絵馬」のコンテンツ化があってもいいのではないだろうか。

しかし、忘れてはならないのは実在の習俗、文化を元にしたフィクションはその習俗、文化がなければ生まれなかっ

たということである。大山氏はこれからのムカサリ絵馬の認知と保存の過程において、フィクションそのものが妨げとなることを危惧していた。「ホラー・オカルトとされ、そう信じられている〈おそろしい〉習俗を、果たして地域住民は保護し、残したいと思うだろうか？」という問題である。ムカサリ絵馬を広く知ってもらうには若者に触れやすい形に変える必要があり、しかしてそれが本来の習俗から乖離しすぎたものであってはならない。

このジレンマを抱えるのはムカサリ絵馬のみならず、日本各地に存在する習俗すべてに言えることであろう。そして、その打開策となるのが正しい習俗に関する知識の認知である。フィクションを楽しむことが悪いのではない。筆者は本来の習俗の知識を持たず、フィクションをそういうものだ、と受け入れてしまうことにこそ問題の本質があると感じている。つまり、問われているのは現代人の信仰心だけではなく、情報処理能力なのだ。

今、失われていく習俗や文化を前にし、それらを受け継いでいく責務を負う我々に必要なのは第一に興味を持つことであり、第二に現物を見ることである。現代の若者は信仰心がなくなっているわけではない。日々情報端末から流れ込むあまりの情報の多さに目がくらみ、そういったものにまで手が届かないだけなのだ。大山氏の言う通り、表面をなぞって面白がっているだけで消えていくものはたくさんある。実際にもう二度と取り戻せないものも沢山あるだろう。だからこそ、時には情報の海を抜け出して、消えゆくものに目を向けなければならない。

人間は基本的に興味のあることや自分たちにとって有益なもの、価値のあるもの以外を残そうとしない。自分たちの抱えられるものは有限であるとわかっているため、必要ないものから切り捨てていくことは確かに合理的である。だからこそ、三瀬氏の言うように、消えゆくもの達をもう一度見直し、現代の若者たちにもわかる新しい価値を与えることが次世代に興味を持ってもらい、「これは残さなければならない」と意識させる第一歩なのだ。三瀬氏の行うような展覧会もアートという意味では創作の一種と言えるだろう。

そして、この試みはあの歪なオカルトホラーたちとは明確に違う立ち位置を見出した。三瀬氏いわく当展覧会で一件もクレームは来なかった、という結果がその意味を確固たるものとしている。当展覧会で展示された現代アートの「ムカサリ絵馬」は、少なくともこれを見た来場者たちにとって冒涜的なものではなかったということだ。これは三瀬氏の作った新たな価値観が現代を生きる日本人達に受け入れられたということである。この違いは「本当の習俗の姿を知っているか」「その習俗に敬意を抱いているか」「その習俗を守る人々と関わっているか」という点に尽きるだろう。性質だけを切り取り誇張して作る作品と、実際にそれを知り、思いを伝えようと作る作品では出来上がるものは全く異なる。

古きものを探し、調査する研究者と、新しい価値を見出し、付加させることができる創作者。この二者のギャップや理解を埋めていくことが、様々な文化や習俗を守り残していくための最も重要な鍵の一つとなるだろう。

本稿は筆者の卒業論文に加筆修正を加え再編集したものである。本稿を執筆するにあたり、アンケートにご協力いただいた学生・ゼミ生と、筆者の拙い聞き書き調査に快くご協力いただいた三瀬夏之介氏、大山龍顕氏、久昌寺住職氏に心から感謝申し上げる。また、筆者の研究を見守り、多大なご教示とご指導を頂いた謝黎准教授を初めとする本学教授陣にも心より感謝したい。

〈参考文献〉

岩井宏美
1974『ものと人間の文化史12　絵馬』
法政大学出版局

奥野克巳
2005「死と葬儀　―死者はどのように扱われるのか？―」『文化人類学のレッスン　フィールドからの出発』p181-205

小田島建己
2007「〈死者の結婚〉のイメージと“写真”―〈ムカサリ絵馬〉の事例にみる―」『論集』34　印度学宗教学会 p143-162
2009「〈死者の結婚〉とその形象―〈冥婚〉・〈死霊結婚〉概念と習俗実態との差異―」『比較民俗研究』23 筑波大学比較民俗研究会 p3-34
2010「奉納のエコノミー―〈死者の結婚〉をプロモートするもの―」『東北文化研究室紀要』51　東北大学大学院文学研究科東北文化研究室 p17-37

金田 明日香
2010「なぜムカサリ絵馬は〈怖い話〉として広まったのか」『東北民俗』44　東北民俗の会 p145-152

櫛木理宇
2013『ホーンテッド・キャンパス　死者の花嫁』株式会社KADOKAWA

小岩環
2002「幻の婚礼――〈ムカサリ絵馬〉を追って」『別冊東北学』3
東北芸術工科大学東北文化研究センター p129-140

崔　吉城
1976「韓国巫俗における死霊祭と霊魂観–捨姫公主神話の構造分析」『朝鮮学報』(78)朝鮮学会
1993「韓国巫俗の死霊祭」『東アジアの死霊結婚』岩田書院　p293-317
櫻井徳太郎
1974『日本のシャーマニズム　上巻』吉川弘文館
1977『日本のシャーマニズム　下巻』吉川弘文館
1987『東アジアの民俗宗教』吉川弘文館
1993b「冥界婚姻の論理―中国の冥婚習俗と死霊観―」『東アジアの死霊結婚』岩田書院 p393-415
佐藤宏
2001a『日本国語大辞典第二版第四巻』小学館
2001b『日本国語大辞典第二版第五巻』小学館
2001c『日本国語大辞典第二版第十二巻』小学館
志賀祐紀
2010「山形県村山地方のムカサリ絵馬について--〈独特な習俗〉観への疑問」『米沢史学』26　米沢史学会(山形県立米沢女子短期大学日本史学科内)p203-226
曹洞宗総合研究センター編
2013『葬送と儀礼』曹洞宗総合研究センター
高松敬吉
1993「青森県の冥婚」『東アジアの死霊結婚』
岩田書院 p11-42
1994「死後結婚―日本・韓国・中国の比較研究―」『比較民俗研究　10』筑波大学 p16-35
田川玄
2005「家族と親族　―親と子は血の繋がっているものか？―」『文化人類学のレッスン　フィールドからの出発』p51-79
都留泰作
2015「脳はホラーを求める? : 世界観エンタメとしての恐怖 (特集 恐怖の報酬 : 「怖いもの見たさ」の謎)」『談 : speak, talk, and think』(104), たばこ総合研究センター p55-74
藤井正雄
1979「禁忌・呪い」『講座日本の民俗7　信仰』有精堂出版 p170-191
伏見祐紀
2008「山形県村山地方のムカサリ絵馬習俗について」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』2008(0) 日本文化人類学会 p201-201
松崎憲三
1993「東北地方の冥婚についての一考察―山形県村山地方を中心として―」『東アジアの死霊結婚』岩田書院 p82-134
松村明
2006『大辞林　第三版』三省堂
三田村信行
2008「怖い話のことなど」『子どもの本棚』日本子どもの本研究会 p27-29
山崎峰水,大塚英志
2008『黒鷺死体宅配便』8　角川書店
山根一郎
2007「恐怖の現象学的心理学」『人間関係学研究』(5) 日本人間関係学会p113-129
web.sugiyama-u.ac.jp/~yamane/kenkyu/2007/fear07.pdf

〈参考URL〉
「山形伝統の婚礼儀式〈むかさり行列〉復活　最上」『朝日新聞』
2018/5/27付
https://www.asahi.com/articles/ASL5V412SL5VUZHB001.html
2018/6/7閲覧

山形県観光情報ポータル　やまがたへの旅『貉のムカサリ』
http://yamagatakanko.com/eventdetail/?data_id=3266&yc=event&yp=1
2018/6/7閲覧

何でもいいから怖い話を集めてみない？「ムサカリ」
http://syarecowa.moo.jp/nanikowa/1/62.html　2012/05/31
2018/6/11閲覧

詩原ヒロ　『冥婚の契』マンガボックス
https://www.mangabox.me/reader/80466/episodes/　2018/8/7閲覧

フジテレビ　世にも奇妙な物語　死後婚
http://www.fujitv.co.jp/kimyo/200821-200825.html　2018/8/7閲覧

クーリエ・ジャポン　死んだ息子の「花嫁」を求めて遺体を奪い合う人々…｜死者たちがあの世で結ばれる「冥婚」の衝撃
https://www.fujisan.co.jp/articles/courrier/09/　2018/11/1閲覧

Yahoo!ニュース　死者の結婚式　「あの世」の幸せ願う山形のムカサリ絵馬師
2017/3/6(月) 11:00配信
https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170306-00010000-yjnewsv-l06&p=1
2018/11/21閲覧